

H I E
比 恵 74

— 比恵遺跡群第134次調査報告 —

2 0 1 6

福岡市教育委員会

HI E
比 恵 74

福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1296集



2016
福岡市教育委員会



1. 1区全景（南西から）



2. SE36遺物出土状況（南東から）



3. SE36出土丹塗壺

序

現在、九州の中核都市として発展をつづける福岡都市圏の人口は、増加の一途をたどっています。そして、これらにともなう開発事業等によって消滅していく遺跡も数多くにのぼっています。

本市では文化財の保護につとめ、これら開発によってやむなく失われる遺跡を記録として後世に残すため発掘調査をおこなっています。

本書もそうしたなかのひとつで、本市博多区博多駅南4丁目において発掘調査を実施した比恵遺跡群第134次調査の記録を収録したものであります。

調査の結果、弥生時代から古墳時代にかけての、遺跡内の中心的な集落が確認され、貴重な資料を得ることができました。

調査に際し快くご理解とご協力をいただきました株式会社ケイコー様には心よりお礼申し上げます。また、ご協力をいただきました関係者各位、地元をはじめ調査を支えられた多くの方々に深く感謝致します。この報告書が市民の皆様の文化財に対する認識とご理解につながり、また、学術の分野に貢献する事ができましたなら幸いに存じます。

平成28年3月25日

福岡市教育委員会

教育長 酒井龍彦

例　言

1. 本書は株式会社ケイコーが実施した博多区博多駅南4丁目99-2、100-1、100-3番地内における共同住宅建設にともなう事前調査として、福岡市教育委員会が平成26年度に実施した比恵遺跡群第134次調査の調査報告書である。
2. 本書で用いる方位は日本測地第2座標系による座標北で、磁北はこれに6° 0' 西偏する。
3. 調査区は予定建物を基軸として任意の3m方眼グリッドを設定し、グリッド呼称は西交点とした。
4. 遺構の呼称は略号化し、竪穴住居→SC・不定形遺構→SX・井戸→SE・土廣→SK・溝→SD・柱穴→SPとした。
5. 本書に使用した遺構実測図は中尾祐太・加藤良彦による。
6. 本書に使用した遺物実測図は中尾・平川敬治・萩原博文・松崎友里・加藤による。
7. 製図は井上加代子・米倉法子・加藤・松崎による。
8. 本書に用いた写真は中尾・加藤による。
9. 本書の執筆・編集は加藤が行った。
10. 本書にかかる記録類・遺物は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵管理されるので活用されたい。

本文目次

I.	はじめに	1
1.	調査に至る経緯	1
2.	調査の組織	1
II.	調査区の立地と環境	3
III.	調査の記録	5
1.	調査の概要	5
2.	弥生中期の調査	10
3.	弥生後期の調査	21
6.	弥生終末～古墳初頭の調査	33
IV.	小結	44

挿図目次

Fig.1	周辺遺跡分布図(1/25,000)	2
Fig.2	調査区位置図(1/4,000)	2
Fig.3	調査区周辺測量図(1/500)	3
Fig.4	遺構全体図(1/200)	4
Fig.5	弥生中期遺構分布図(1/400)	5
Fig.6	SC6-52実測図(1/60)	6
Fig.7	SC33-34-35-42-93-95実測図(1/60)	7
Fig.8	SC6-33-42-52-93-95実測図(1/40)	8
Fig.9	SE36-89-101実測図(1/40)	10
Fig.10	SE36出土遺物実測図(1/4・1/3)	11
Fig.11	SE89出土遺物実測図(1/4)	12
Fig.12	SE101出土遺物実測図(1/4・1/8)	13
Fig.13	SK9-16-20-32-58-72-102実測図(1/40)	14
Fig.14	SK16-20-32-72出土遺物実測図(1/3-1/4)	15
Fig.15	SX107-112-113-114実測図(1/60)	17
Fig.16	SX107-112-113-114出土遺物実測図(1/4-1/3-2/3)	18
Fig.17	柱穴出土遺物実測図(1/4-1/3)	19
Fig.18	旧石器他出土遺物実測図(1/3-1/4)	20
Fig.19	弥生後期遺構分布図(1/400)	21
Fig.20	SC53-68-94実測図(1/60)	22
Fig.21	SC53-68-94出土遺物実測図(1/4)	23
Fig.22	SE12-40-90実測図(1/40)	23
Fig.23	SE12出土遺物実測図(1/4)	24
Fig.24	SE12出土遺物実測図(1/8-1/4-1/3-2/3)	25
Fig.25	SE40出土遺物実測図(1/3-1/4)	26
Fig.26	SE90出土遺物実測図(1/4)	27
Fig.27	SE90出土遺物実測図(2/1-4-1/3)	28
Fig.28	SK65-81-104-SD8実測図(1/40)	30
Fig.29	SK65-81-SD8出土遺物実測図(1/4-1/3-2/3)	30
Fig.30	その他の後期出土遺物実測図(1/3-1/4)	31
Fig.31	弥生終末～古墳前期遺構分布図(1/400)	32
Fig.32	SC5-18-85実測図(1/60)	33
Fig.33	SC5-85出土遺物実測図(1/4-1/3)	34
Fig.34	SC19-22-97実測図(1/60)	35
Fig.35	SC19出土遺物実測図(1/4-1/3)	36
Fig.36	SC97出土遺物実測図(1/4-1/3)	37
Fig.37	SE1-54実測図(1/40)	38
Fig.38	SE1出土遺物実測図(1/4)	39
Fig.39	SE54出土遺物実測図(1/4)	40
Fig.40	SK67-71-82-83-88実測図(1/40)	41
Fig.41	SK67-71-82-83-87-88出土遺物実測図(1/4-1/3)	42
Fig.42	柱穴その他の出土遺物実測図(1/4-1/3)	43

I. はじめに

1. 調査に至る経緯

今回の調査は、福岡市博多区博多駅南4丁目99-2、100-1、100-3番において、株式会社ケイコーにより共同住宅建設設計画の策定に当たって、平成26年6月13日に埋蔵文化財の有無の照会が埋蔵文化財審査課になされた事により始まる。申請面積は1,475.63m²、受付番号は26-2-220である。

申請地は過去に第70次、第102次調査が実施されており、この両調査区を含めた開発計画であった。このため調査終了城を除いた対象範囲での遺跡の遺存が確定的であり設計変更も不可能であつたことから、調査終了城を除いた、遺跡の破壊を免れない建物部分に限定して記録保存のため発掘調査を実施する事となり、同社と福岡市との間で委託契約が締結された。

発掘調査は平成26年9月26日に着手、27年2月10日に全ての工程を終了した。

調査番号	1422	遺跡略号	HIE-134
調査地地籍	博多区博多駅南4丁目99-2、100-1、100-3番	分布地図番号	37(東光寺)0127
調査面積	545 m ²	調査実施面積	414 m ²
調査期間	140926～150210	事前審査番号	26-2-220

2. 調査の組織

【調査委託】 株式会社 ケイコー

【調査主体】 福岡市教育委員会

(発掘調査:平成26年度・整理報告:平成27年度)

【調査総括】 文化財部埋蔵文化財調査課

課長 常松幹雄

同課調査第1係長 吉武学

【調査庶務】 埋蔵文化財審査課

管理係長 内山広司(26年度)

管理係長 大塚紀宜(27年度)

管理係 川村啓子

【発掘調査】 埋蔵文化財調査課調査第1係

主任文化財主事 加藤良彦

同第2係

文化財主事 中尾祐太

【発掘作業】 唐島栄子

辻節子

三谷朗子

岩本三重子

桑原美津子

林厚子

梅野眞澄

村山巳代子

中村桂子

松本順子

中村尚美

野崎賢治

柴野孝子

安東昌信

上野照明

篠原俊夫

吉野一憲

吉岡正寿

大坂由布子

田中ゆみ子

遠竹卓馬

原野容子

室井三太郎

【整理作業】 国武真理子

窪田慧



Fig. 1 周辺遺跡分布図(1/25,000)

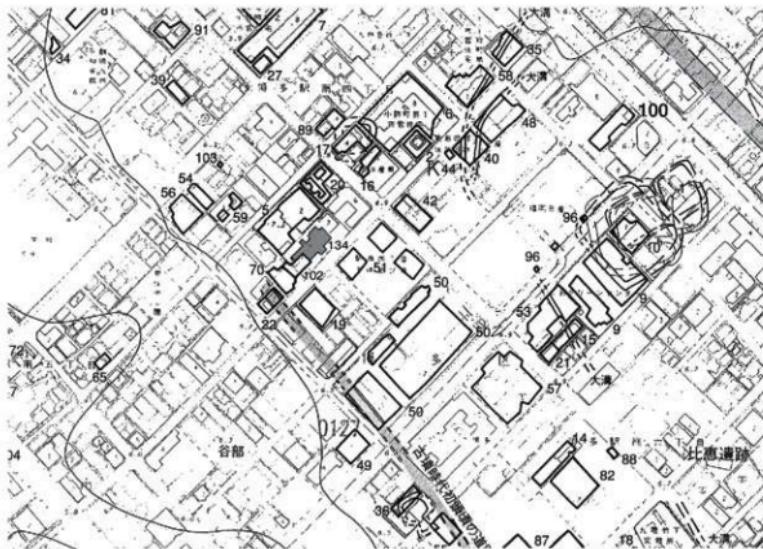


Fig.2 調査区位置図(1/4,000)

II. 調査区の立地と環境

比惠・那珂遺跡群は福岡市の都心部より東へ1km、海岸線より南へ4kmの地点の、福岡平野の中央部を流れる那珂川と御笠川に挟まれた、春日丘陵から延びる阿蘇火砕碎屑堆積物による八女粘土層・鳥栖ローム層に覆われた洪積台地上に立地し、須玖遺跡群から井尻B遺跡・五十川遺跡・本遺跡群へと連なる、殊に弥生時代から古代にかけて中枢城を示す重要な遺跡が分布する(Fig.1)。

本遺跡群は標高 5~10m 南北 2.5 東西 1.0 km 程の範囲に広がり、台地縁辺部は河川の開析により樹枝状の複雑な地形となる。台地中央の鞍部を挟んで便宜的に北部を比恵遺跡群・南部を那珂遺跡群と呼称しており、本調査区は比恵遺跡群のほぼ中央に位置する。周辺には多くの既存調査地点が点在し、同一敷地内の南西に第 70・102 次調査区が隣接する (Fig.2)。地表面標高は 7.1m を測る。

周辺の調査状況を概観すると、第5次調査では弥生中期～古墳前期の竪穴住居・掘建柱建物・井戸が、第19次・51次調査では弥生中期後半～古墳前期を中心とした集落が検出され、周辺300m程度は該期の密集地帯である。また、第22次調査区では丘陵の西斜面と弥生中期の竪穴住居・古墳前期に遺跡群を南北に縦貫する道路状遺構の一部が検出されている(Fig.3)。

同一敷地内の第70・102次調査区では弥生中期の竪穴住居7軒・井戸2基・土壙10基・掘建柱建物1棟、後期の竪穴住居5軒・井戸2基・土壙5基・周溝状遺構1基、弥生終末～古墳前期の竪穴住居9軒・井戸1基・土壙5基が検出され、中期の遺構から青銅器鋳型・ガラス小玉、後期の遺構から鐸形土製品、終末～古墳前期の遺構から絵画土器・鉄斧・ヤリガンナ・鉄素材が出土している。いずれも無数の柱穴を含む、同期の遺構で足の踏み場もない程高密度な遺構分布となっている。

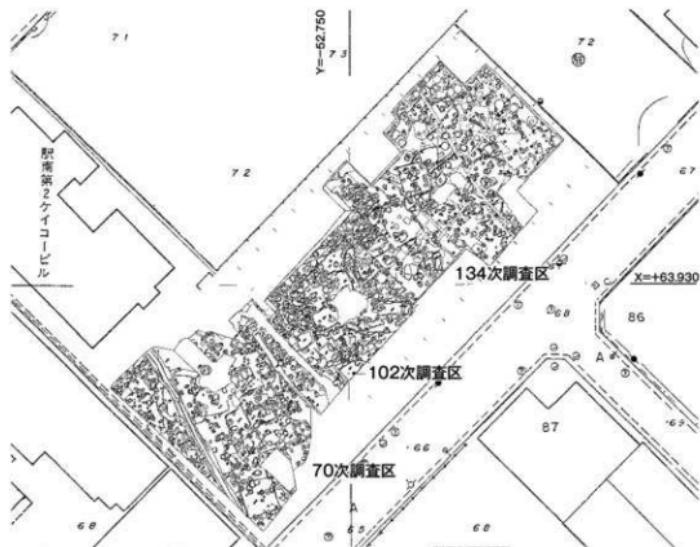


Fig.3 調査区周辺測量図(1/500)

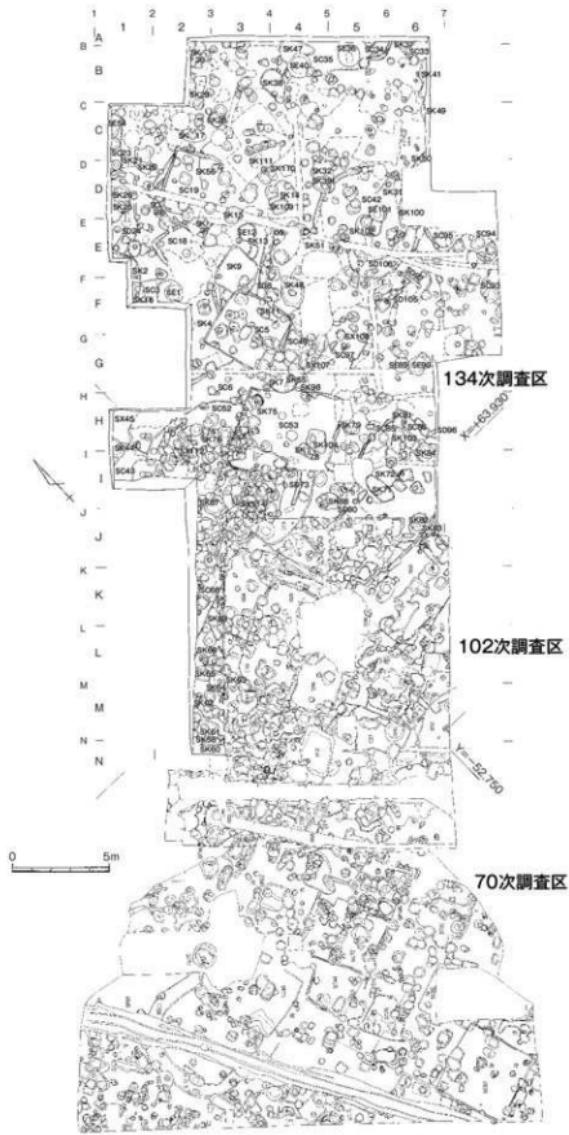


Fig.4 遺跡全体図(1/200)

III 調査の記録

1. 調査の概要

本調査区は比恵遺跡群のほぼ中央に位置し、周辺には多くの既存調査地点が点在する。42・51次調査区を最高所として、北西から開析された谷への西緩斜面上に立地する。遺構面は本調査区東端から72次調査区西端まで50cm下がる。地表面標高は7.1mである(Fig.1～3)。

層序は(Fig.20)40～50cmの表土下に15～20cm程の暗褐色遺構覆土が堆積するが、多数の遺構の切り合いで上面での検出が困難であり、実際の検出面は10cm以上下がっている。

調査は既存の70・102次調査区を除いた建物部分に限定し、測量基準線は予定建物の基準線に合わせ、任意で3mグリッドを設定した。調査区を東西で二分し、排土を反転して調査を実施する事とし、東半部を調査1区として9月26日より重機による表土剥ぎに着手し、同日より作業員を導入し遺構検出を開始した。12月6日に測量・実測を完了し、同8日より重機による排土反転を開始

し西半部の2区の表土剥ぎを実施した。翌2月2日に測量・実測を完了し、同日重機による埋め戻し、3日に調査機材を撤収し調査を完了した。

検出したおもな遺構は、弥生時代中期竪穴住居12軒・井戸3基・土壙27基・溝1条・不整形土壙6基、後期竪穴住居4軒・井戸3基・土壙8基・溝1条、終末～古墳前期竪穴住居8棟・井戸2基・土壙25基・溝2条である。柱穴は574検出した。遺物は、各遺構から旧石器・弥生土器・石器・土師器・須恵器などコンテナ95箱分検出している。



Fig.5 弥生中期遺跡分布図(1/400)

2. 弥生時代中期の調査

中期の遺構は後半代を主に、竪穴住居12軒・井戸3基・土壙27基・溝1条・不整形土壙6基を検出し、全体の47%を占めており、中心的な時期を示している。70・102次調査に比しても高い分布を示す。出土遺物総量の7～8割は該期の土器であり、これを裏付けている。住居は方形と円形があり、円形が大型である。

1). 竪穴住居 SC6 (Fig.6) G3グリッドに位置し、方形プランでSC5・52に切られ、床面と幅18cmの直線に延びる壁溝の一部が現況で4m弱を残すのみである。深さは10cm弱。主柱穴は不明である。遺物は少量の弥生土器とガラス小玉を検出している。

出土遺物 (Fig.8) 1は鋤先口縁壺の小片。口唇を

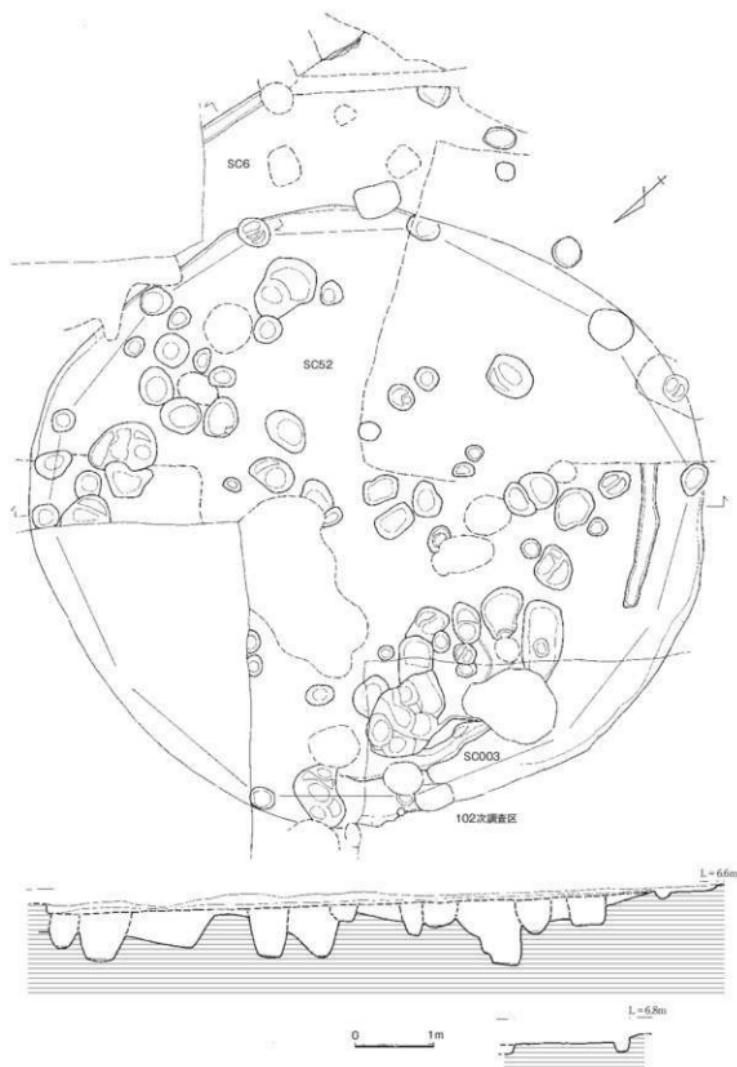


Fig.6 SC6・52実測図(1/60)

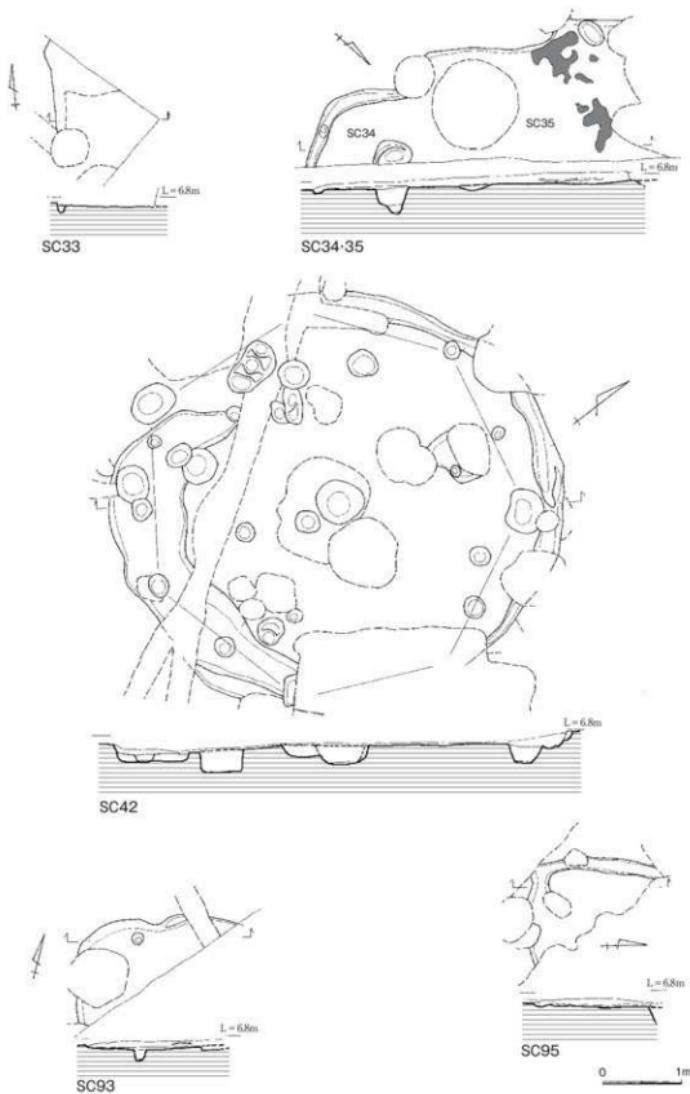


Fig.7 SC33-34-35-42-93-95実測図(1/60)

窪ませる。色調は鈍い黄色。**2・3**は甕。**2**は「逆L字」口縁で、端部は丸く収め胴が張る。明褐色を呈する。**3**は底部片で復原径 7.4 cm。底面厚は 1.0 cm でやや薄め。灰白～浅黄色を呈する。**4**はガラス小玉。径 3 mm, 孔径 1 mm を測る。明緑色の透明で弥生期では珍しい色調である。中期中頃。

SC52 (Fig.6 PL2-1) I3 グリッドに位置し、円形プランで SC6 を切り SC53 に切られる。一部は 102 次調査の SC003 として報告されている。径 8.8m・深さ 16 cm の大型の住居で、壁に沿って 1.6～2.6m の間隔で 12 本の柱が巡るとおもわれる。中央部は不整形構造 SX112・114 の小穴群が下面に密集し、検出時この覆土も同時に掘削したため、大部分の床面を失っており、炉・主柱穴を明確にできない。壁溝は巡っていないが、壁から 60～80 cm 内側に幅 25 cm 程の溝が部分的に巡っており、建て替えの可能性も考えられる。遺物は弥生土器がコンテナ半量程出土しているが、固化にたまる資料は少ない。

出土遺物 (Fig.8) **9～11**は「逆L字」口縁の甕で **9**は口径 28 cm で鈍い橙色、**10**は口径 25.6 cm を測り明褐色を呈する。**9**は厚い口縁端部を丸く收め、**10**は胴が張り口縁内端が突出気味になる。**10・11**は外面にタテハケを施す。**12**は鋤先口縁甕の小片。橙色を呈す。中期中頃～後半。

SC33 (Fig.7) B6 グリッドに位置し、方形プランと思われ SK37 に切られ、大部分は調査区外に広がる。平坦な床面を幅 1.2m 程残すのみで、深さは 6 cm 程。遺物は少量の弥生土器を出土している。

出土遺物 (Fig.8) **5**は「逆L字」口縁の甕の小片。内外面にヨコナデを施す。色調は明橙色。中期中頃。

SC34・35 (Fig.7 PL2-2) B4～5 グリッドに位置し、大部分は東の調査区外に広がる。方形プランでコーナーの一部が現出している。2 軒の切り合ひ部を中期末の SE36 と柱穴に切られ前後関係は明瞭でないが、SC35 は焼失家屋で、炭化材の分布で分けられる。方位はとともに N-45°-W により大きな時期差はないと思われる。SC35 は残存部で 2.56+α×1.5+α m 深さ 12 cm 程で、北西側

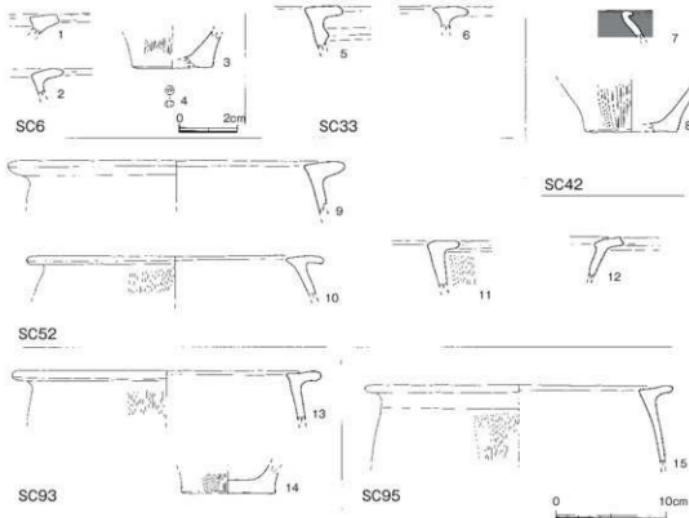


Fig.8 SC6・33・42・52・93・95出土遺物実測図(1/4・2/3)

に床から 3~5 cm 程浮いて薄い炭化材が散布する。SC34 は残存部で $1.3 + \alpha \times 0.8 + \alpha m$ 深さ 8 cm 程で、幅 15 cm 程の壁溝が巡る。SE36 を越えては検出されず、幅 2.5m 以下に収まる小形住居と思われる。出土遺物は少量の弥生土器のみで図化に耐える資料はない。

SC42 (Fig.7 PL2-3・4) D5 グリッドに位置し、中期末の SE101 に切られる。円形プランで径 5.85m・深さ 20 cm を測る。北側に幅 20 cm 前後の壁溝が、南側は幅 90 cm 前後の幅広となり北側とは連結しない (SD106)。SC52 同様壁に沿って 2m 前後の間隔で、径 50 cm 程の大振りの掘方の 7 本の柱が巡り中間に 25 cm 程の小振りの補助柱が立つ傾向にある。中央部は SK102 によって大きく削平され、炉の有無は不明。遺物は上面に古墳頂頭の SK31 が重なっていたためかなり混在しているが、壁溝からは須歟 I 式期の土器片が少量出土している。

出土遺物 (Fig.8) 7 は丹塗無頸壺の口縁部小片。端部を短く水平に屈曲する。8 は甕の底部で底径 8.1 cm を測る。外面に粗目のタテハケを施す。底面厚は 8 mm と薄く灰褐色を呈する。中期後半。

SC93 (Fig.7) F7 グリッドに位置し、方形プランでコーナーの一部が現出。大部分は東の調査区外に広がる。残存部で $2.4 + \alpha \times 0.96 + \alpha m$ 深さ 14 cm を測り、方位を N - 17° - W にとる。主柱穴・炉は調査区外に遺存すると思われる。遺物は少量出土。

出土遺物 (Fig.8) 13 は「逆 L 字」口縁の甕で復原口径 25 cm。口縁から内面はヨコナデ、外面口縁以下にタテハケを施す。灰黄褐色を呈する。14 は甕底部で復原底径 8.2 cm を測る。内面にナデ、外面にタテハケを施す。明赤褐色を呈する。中期中頃～後半。

SC95 (Fig.7) E6 グリッドに位置する方形プランの竪穴住居で、コーナーの一部が遺存し、大部分を搅乱されて消失するが、SC42 と切り合う位置にある。残存部で $1.75 + \alpha \times 1.5 + \alpha m$ 深さ 15 cm を測り、方位を N - 0° - W にとる。幅 20 cm 弱の浅い壁溝が遺存する。遺物は少量出土。

出土遺物 (Fig.8) 15 は「逆 L 字」口縁の甕で復原口径 26 cm を測る。口縁から内面はヨコナデ、頭部以下の外面に細かなタテハケを施す。焼成は良好で、胎土は精良。色調は明赤褐色を呈する。中期中頃～後半を示す。

2). 井戸 調査区東部の主軸に沿って一直線上にほぼ 12m 間隔で 3 基検出し、2 基は住居を切る。
SE36 (Fig.9 PL2-5・6) B5 グリッドに位置し、SC35 を切る。円形プランで上端で径 1.15m、断面は -1.2m 以下から狭くなり、南に 2 段のテラスを設けて、底面は 57×32 cm の楕円形となる。深さは 2.58m。この断面の変化点近くまで土器片と地山ブロック混じりの黒灰色土で埋め戻され、以下の GL-1.4~2m 間に下半を打ち欠いた大型甕の全周分の破片を含む多くの土器片を投棄し、大型甕片の直下から完形の丹塗壺が出土しており、井戸廃棄の祭祀品の一括投棄と考えられる。この間から底面近くまでは黒灰色粘質土が堆積する。遺物は上層からコンテナ 2 箱分、下層から 1/2 分出土した。

出土遺物 (Fig.10) 16 は上層出土の甕。復原口径 16.4 cm、口縁が「く字」状に湾曲し、内面は若干稜をなす。口唇を浅く窪ませ口縁内面から外面に丹塗りを施す。17~20 は下層出土。17 は大型筒型器台の脚端部。復原径 24.6 cm を測る。端面は浅く窪ませ外面に丹塗後タテ方向の暗文を施す。18 は大型甕片直下から出土した完形の丹塗磨研壺で、口径 15.0 cm 器高 20.2 cm を測る。口唇は浅く窪ませ頸部と胴部中位に「M 字」突帯を施す。内面頸部上半から外面に丹塗後外面頸部と突帯間にタテ方向の 3~4 条単位の暗文を施す。胴部下位はヨコ底部脇はタテケンマを施す。胴部内面にはタテハケを残す。廃棄時に口縁の対面部 2 ヶ所を打ち欠いているが、精緻なつくりの優品である。19 は壺の下半破片で復原底径 8.2 cm、内面に指頭圧痕が残る。純い橙色を呈する。20 は浅く若干湾曲する「く字」口縁の中形甕で、復原口径 48 cm を測る。外面口縁下に細い四角突帯を 1 条、以下に細かな

タテハケを施す。色調橙色。**21**は「立岩式」の大形甕で、胴下半を丁寧に打ち欠き円筒状を呈する。口径40 cm、胴部最大径62.4 cmで胴が大きく張るが、井戸径よりは随分小さい。多くの破片で出土したが全周が遺存する。井戸廃棄祭祀時に井筒を模して用い、使用後破碎して廃棄したと考えられる。「逆L字」口縁で端部は肥厚し下方に若干下がり、以下に1条胴部最大径下に2条の「M字」突帯を施す。橙色を呈する。**22・23**は上層出土の石戈片。**22**は鋒片で、縦割りした裏面と鎌部を敲き減らし磨製石鎌に転用する中途で、 4.8×3.9 cmを測る。真岩製。**23**は無闇の基部片で転用素材として方形に小削されている。 6.7×5.0 cmを測る。結晶片岩製。**24**は下層出土の玄武岩の偏平円錐を用いた叩石で、長辺の両側を主に平坦部の一部も使用している。 14.7×5.7 cmで367gを測る。他に上層から糸切り土師器皿の小片が1点混入して出土している。中期末。

SE89(Fig.9 PL3-1) G6 グリッドに位置する。円形プランで上端で径0.8m深さ1.86m、底面で径38 cmの円形となる小振りの井戸で、中位に窪みはない。GL~1.6mまでに地山ブロック混じりの黒灰色粘質土が、以下に灰色混砂粘質土が堆積する。遺物はコンテナ1.5箱分出土した。

出土遺物(Fig.11) **25~27**は上層出土。**25**は丹塗袋状口縁壺の口縁で、復原口径13.6 cm。袋部の湾曲幅とともに小さい。外面口縁下に小さな三角突帯1条、以下にタテ方向の暗文を施す。**26**は復原底径8.0 cmの甕底部。底部脇のくびれは緩く底面厚も6 mmと薄い。内面ナデ外面タテハケを施す。**27**は筒型器台上部。復原口径8.4 cm。口唇上部を窪ませ内面に指頭圧痕、外面にタテハケを施す。鈍い橙色。**28~32**は下層出土。**28~30**は丹塗磨研壺。**28~29**は鶴先口縁、**28**は小口径で11.3 cmを測る。口唇端部は浅く窪ませ外面部にタテハケを施す。内面はヨコハケ後ナデ。**29**は復原口径16.2 cm。口唇を浅く窪ませ刻目を施す。**30**は胴部片で「M字」突帯に刻目を施し、以上にタテの暗文を施す。**31~32**は口縁が「く字」状に屈曲する甕で、**31**は口径27.2 cmの浅い器体。口唇は若干肥厚し

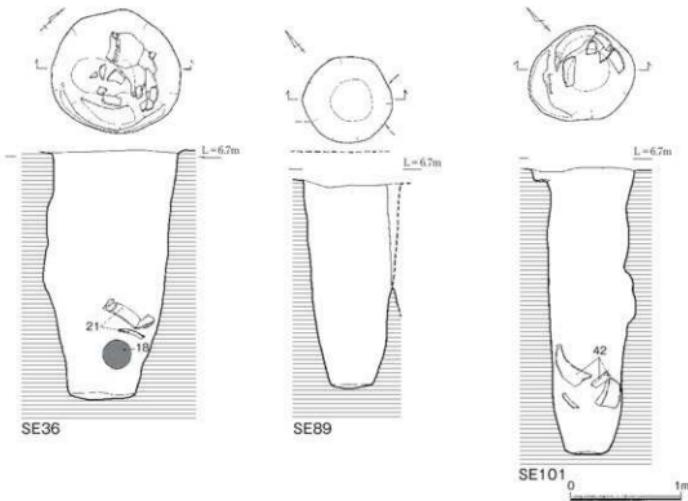


Fig.9 SE36・89・101実測図(1/40)

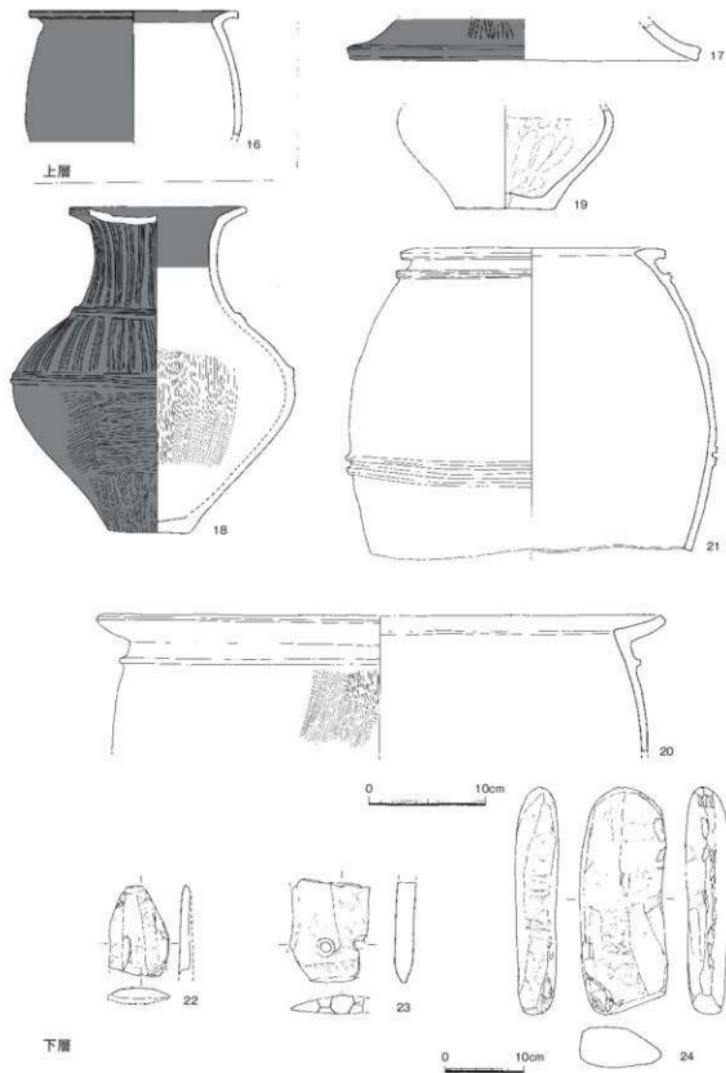


Fig.10 SE36出土遺物実測図(1/4-1/3)

端部は面取りする。内面屈曲部は稜が立ち気味になり、外面体部に細かなタテハケを施す。鈍い橙色を呈する。32は復原口径26.7cm、胴が張り、口縁内面湾曲部は稜を成す。以下はナナメハケをナデる。33は支脚脚部片。復原径12.2cm、器壁が厚く最厚で4.7cmを測る。粗いナデ調整で被熱し鈍い黄橙色を呈する。他遺構でも目立つて出土する。中期末。

SE101 (Fig.9 PL.3-2・3) D5グリッドに位置し、SC42を切る。円形プランで、上端で径0.9mの小振りの井戸。断面は-10cm程の西側上位にテラスを設け、-1.2mあたりが10cm程抉れる。底面は径40cm程の円形ではほぼ直線的に狹くなる。深さは2.58m。GL-1.6~2.2mあたりの下位にSE36同様、下半を打ち欠いた大型甕の破片を含む多くの土器片等を投棄しており、井戸廃棄の祭祀品の投棄と考えられるが、大型甕は半周分の破片しかない。この上面まで土器片・地山ブロック混じりの黒灰色土で埋め戻し、以下に黒灰色粘質土が堆積する。遺物はコンテナ2箱分出土している。

出土遺物 (Fig.12) 34・35は上層出土。34は「く字」口縁の甕で、緩く湾曲し端部は丸く收め、内面は稜を成す。外面口縁下に三角突帯を1条施す。鈍い橙色を呈する。後期初頭を示す。35は壺底部。復原径9.8cmの広い底部で底部脇のくびれは緩い。外面に細かいタテハケを施す。鈍い黄色を呈する。36~42は下層出土。36・37は丹塗磨研袋状口縁壺の口縁で、36は復原口径11cm、袋部の湾曲、幅ともに大きめで、橙色を呈する。37は復原口径9.2cm。袋部の幅は小さく、外面口縁下の突帯が一體となり段を成す。38は壺底部。復原径7.4cmを測り、外面に細かいタテハケを施す。鈍い黄色を呈する。39は丹塗磨研の樽形の無頸壺で、外面口縁下の幅2cm程の突帯が剥離する。突帯下にヨコケンマを施す。40は「く字」口縁の甕。復原口径23.6cmを測る。端部は丸く仕上げ外面口縁下に低い三角突帯を1条、胴が張り以下に細かなタテハケを施す。内面屈曲は緩い稜を成す。鈍い橙色。41は復原径11cmの広い甕底部で底面厚は1cmと薄く、胴部と変わらない。底部脇のくびれは緩い。外面に細かなタテハケを施す。鈍い黄色を呈する。42は「立岩式」の大形甕で、胴下半を粗く打ち欠き円筒状を呈するが、全周の1/2しか遺存しない。口径54cm胴部最大径64cmで、井戸径よりは小さい。口縁は「く字」に屈曲し内面が稜を成し、端部が肥厚する。口縁下に1条、胴部最大径下に2条の「コ

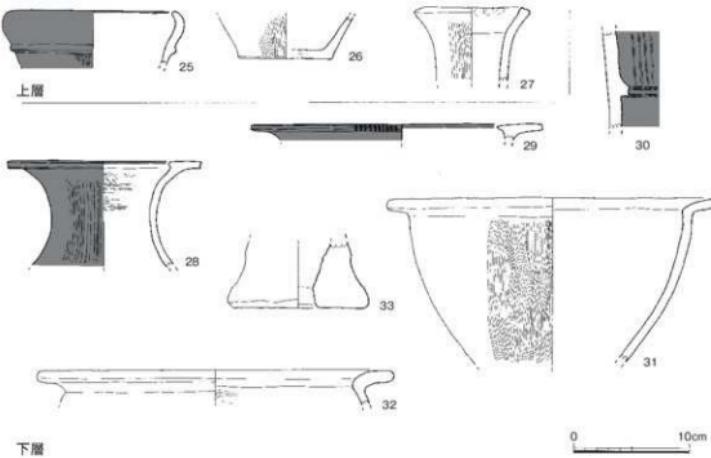


Fig.11 SE89出土遺物実測図(1/4)

字」突帯を施す。鈍い黄橙～橙色を呈する。中期末。

3).土壤 土壤は、調査区中央の堅穴住居間で散漫に、周辺に密に27基検出した。

SK9(Fig.13) E3グリッドに位置し、SC10を切りSC5に切られる。2.1×2.05mの方形プランで深さ24cmを測る。南に幅30cm程のテラス部がある。遺物は須歎Ⅱ式を中心にコンテナ1/2分出土しているが、図化に耐える資料は少ない。中期後半。

SK16(Fig.13) F1グリッドに位置し、SC3を切りSK2に切られる。方形プランのコーナー部の検出で大部分は調査区外に遺存する。深さ42cmを測る。遺物は少ない。

出土遺物(Fig.14) 43は壺胴部。復原底径7.1cmを測る。底部脇のくびれは殆ど無くなり、外面に雜なタテハケを施す。橙色。44は樽形の無頸壺で、復原口径13.8cm。外面口縁下に低い三角突帯を1条施し以下の胴が張る。内外面ナデ調整で明褐色を呈する。中期末。

SK20(Fig.13) D1グリッドに位置する略楕円形プランの土壤で、後期の柱穴に切られる。1.13×0.63mで深さ25cmを測る。遺物は多くコンテナ1/2分出土している。

出土遺物(Fig.14) 45・46は壺。45は小形の錐先口縁壺で復原口径14.2cmを測る。橙色を呈する。46は大振りな無頸壺で、復原口径16cm。「逆L字」に屈折する口縁上面に、焼成前穿孔の蓋の緊縛孔がある。橙色を呈する。47は「逆L字」の甕で復原口径26cm。胴がやや張る。中期後半。

SK32・39(Fig.13) D4グリッドに位置し、SC42と切り合う。1.65×1.13mの方形プランで深さ20cmを測る。南に95×93cm深さ25cmのSK39が重なるが時期差は無く、同時か別遣構であるかは不明である。遺物は少量出土している。

出土遺物(Fig.14) 48は広口壺。復原口径23.2cmを測る。口唇を浅く窪め、頸部下に沈線を1条施す。外面にヨコナデを施し鈍い黄色を呈する。49は甕底部で、復原底径7.6cmとやや狭い。鈍い橙色を呈する。中期中頃。

SK58(Fig.13 PL3-4) M2グリッドに位置する、略方形の土壤で1.16×1.0m深さ78cmを測る。

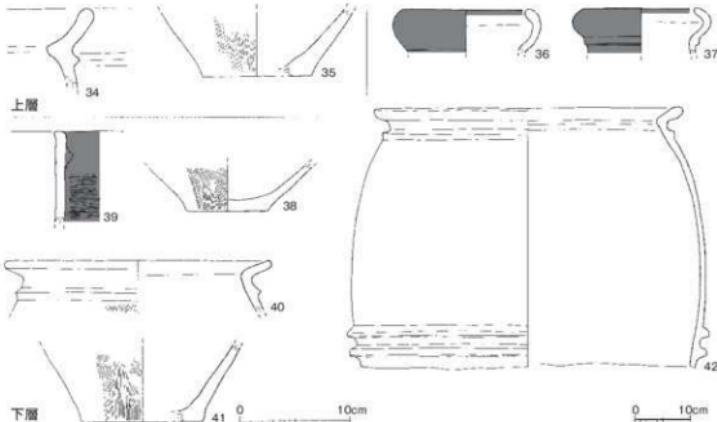


Fig.12 SE101出土遺物実測図(1/4・1/8)

底面に径42cm深さ15cmの掘り込みがあり、大型の柱穴の可能性もあるが、周辺に組するものが無く、土塙として扱った。GL-35cmまで炭粒と土器片を多く含む黒灰色土が、以下に地山ブロック混じりの黒灰色土が堆積する。遺物はコンテナ1/2分出土しているが、図化に耐える資料は少ない。中期後半。

SK72 (Fig.13 PL3-5) I6グリッドに位置し、SK71に切られる。1.62×1.25mの隅丸方形プランで深さ25cmを測る。上位に黒灰色土が、下位に炭粒を多く含む暗黄灰色土が堆積し、遺物の多くはこの層中から床上で検出される。床上には周縁を打ち欠いた壺の胴下半(52)を掘え、内底15cm程の範囲に水銀朱が付着する。この上面を同じく周縁を打ち欠いた壺胴下半(51)が上下反転して蓋としてこれを覆っており、朱の容器として使用している。

出土遺物 (Fig.14) 50は壺で、復原口径16.2cmを測る。口縁は肥厚し、端部は粘土帯を貼付し、短い「逆L字」口縁に整形する。中期前半。51は朱容器の蓋に転用した壺胴部下半で、復原底径9.4cmとやや広い。外底は浅い上げ底となる。鈍い橙～黄橙色を呈する。52は朱容器の身に転用した壺胴部下半で、復原底径7.2cmで狭い。外底は浅く窪む。外面上位はヨコケンマ、底部脇はタテケンマを施す。内底の径15cm深さ2.5cm程に水銀朱を詰めた痕跡が残る。鈍い橙色を呈する。53は小割された石包丁片で、5.3×2.2cmの方形に磨製石礫の素材として加工している。暗紫灰色凝灰質砂岩。54は小形の偏平片刃石斧片で、残存で3.0×1.5×0.6cmを測る。断面上部と上端部が欠落し、破断面に研磨を加えた素材転用を図っている。凝灰質安山岩ホルンフェルス製。中期後半。

SK102 (Fig.13) E5グリッドの、SC42の中央に位置しこれを切り、SE101に切られる。1.32×1.0m

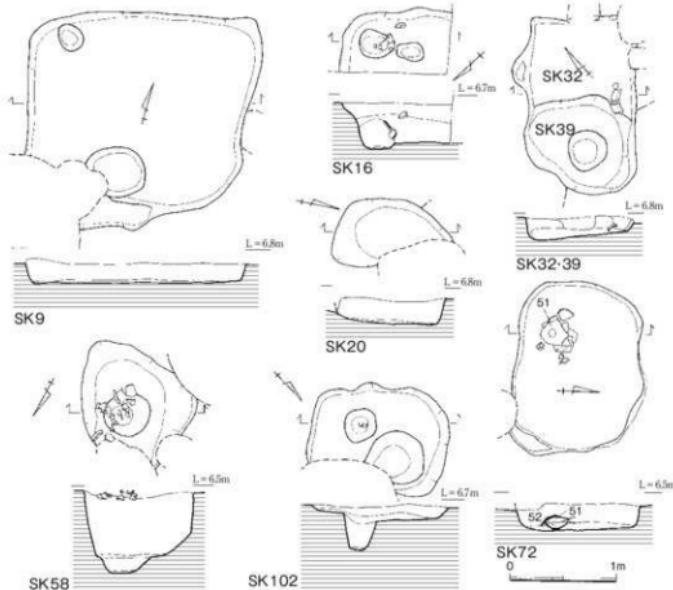


Fig.13 SK9-16-20-32-39-58-72-102実測図(1/40)

の隅丸方形プランで、深さ15cmを測る。遺物は少量出土する。

出土遺物 (Fig.14) 55は丹塗磨研袋状口縁壺の口縁で、復原口径14cm。袋部の湾曲・幅はともに小さく、外面口縁下の突帯が段を成し、さらに沈線を1条施すことによって、断面が「M字」状を成す。56は薄手の支脚で、復原脚径9.6cmを測る。被熱で内面が爆ぜ赤橙色を呈する。中期中頃。

4).不整形土壤 明らかな倒木痕2基(SX45・108)と、調査区中央から西部にかけて小穴が密集する4基の大形の不整形土壤を検出した。一部は柱穴が重なるが、黒灰色土が堆積する浅い皿状の不整形土壤の底面に、暗黄灰色土を覆土とする小穴群が検出される。土取り場とされる他調査地点の不整形土壤に似るが、これらが1~2m前後の小土壤が密集するに比べると、個々の単位が小さく様相はやや異なる。倒木痕の可能性も考えたが、壁面は大部分真っ直ぐに立ち上がり、これともまた異なる。遺物は上層から多く検出され、下層からの検出は少ない。

SX107 (Fig.15) G4グリッドに位置し、SK7・SC46に切られる。2.84×1.2mの不整形プランで中央が10~15cm程窪み、径40~80cm程の小穴が12~13重なる。深さは50cm前後を測るものがある。

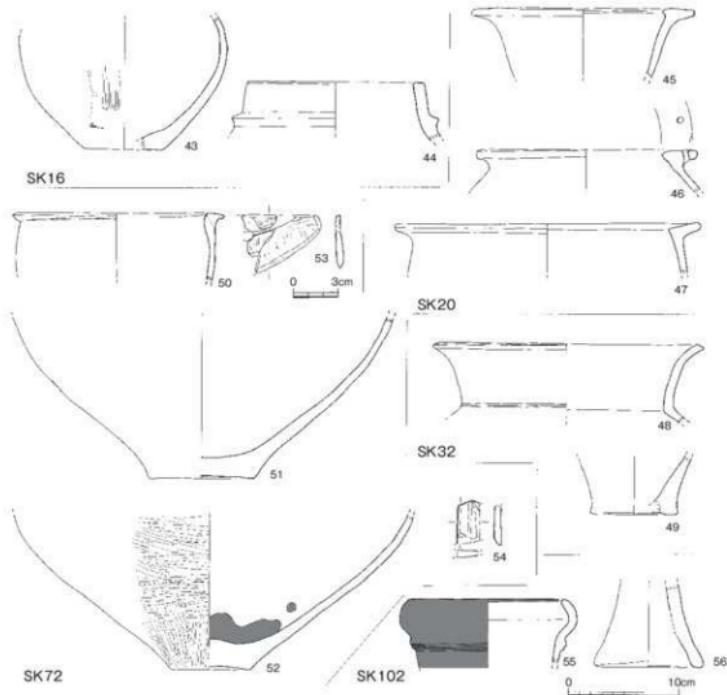


Fig.14 SK16・20・32・72・102出土遺物実測図(1/4-1/3)

多い。遺物はコンテナ1箱分出土した。

出土遺物(Fig.16) **57**は「如意」形口縁の甕で、端部は丸く收め外面下に低い三角突帯を1条施す。以下に細かなタテハケを、口縁内外はヨコナデを施す。復原口径28.4cmを測る。純い黄橙色。**58**は「逆L字」口縁の甕で胴が張る。復原口径22.6cm。外面口縁以下に細かなタテハケ、口縁内外はヨコナデを施す。橙色を呈する。**59**は青色ガラスの管玉で、銀化が進み殆ど灰白色を呈する。長さ9mm径2.5内径1mmの小品である。**60**は自然の亜角礫を用いた石皿で、28.7×15.8×7.6cmを測る。上下平坦面を使用し、上面を主に用い中央が5mm程皿状に窪む。玄武岩製。中期後半。

SX112(Fig.15) H~12グリッドに位置し、SC52下でSX112・113とともに検出された。SC52の柱穴ともとれるが、SC52床上で検出される柱穴とは覆土が明らかに異なり、柱痕跡も検出されない、密集度が過密に過ぎることからこれらは別遺構と判断した。3.2×2.4mの不整形プランで中央が15cm程窪み径20~80cm程の小穴が20前後重なる。深さは50cmを越えるものが多い。遺物は少量。

出土遺物(Fig.14) **61**は下層出土の甕底部。底径9.5cmでやや広く、底面厚は1cmで胸部と変わりない。外面に細かなタテハケを施す。内面には指頭圧痕が残りナデを施す。純い黄橙色を呈す。**62**は土器片転用の紡錘車。径3.2厚0.5cmを測る。周縁を磨り取り、中央に一方から径4mmの軸孔を穿孔する。**63**は下層出土の小形の柱状片刃石斧で、基部を破損する。現況で、5.1×1.2×1.2cmを測る。凝灰質安山岩ホルンフェルス製。中期後半。

SX113(Fig.15) H3に位置し、SC52・53下で検出された。2.66×1.84mの不整形プランで中央が20cm程下がり径25~60cm程の小穴が15前後重なる。深さは80cm前後を測るものが多い。遺物は下層から須玖I式期の土器片が少量出土する。

出土遺物(Fig.16) **64**は有脚の無頬三角形鉄鎌。3.1×2.0×0.4cmで6gを測る。脚は8mmを測り欠損側は幅が狭い。

SX114(Fig.15 PL3-6) I~J3~4グリッドに位置し、SC52の南側下で検出された。4.98×4.22mの不整形プランで中央が25cm程下がり、径35~90cm程の小穴が30前後重なる。深さは70cmを越えるものが多い。遺物は上層でコンテナ1/2、下層で少量出土する。

出土遺物(Fig.16) **65**は狹口の鍔先口縁壺で復原口径14cm。頸部のぐびれは上位にあり外面に小さな三角突帯を1条施す。色調は黄橙色を呈する。**66**は丹塗磨研の「逆L字」口縁の甕で、復原口径32cm。端部はやや下がり口唇は浅く窪め、刻目を施す。内端は若干突出する。**67**は土製の投弾。3.2×2.0×1.9cmで11gを測る。**68**は土器片円盤で甕胴部片を打ち欠き円形に整形する。3.8×3.5×1.0cmで18gを測る。**69**は砂岩製の砥石で、長軸の平坦面4面全てを使用し、使用のため上下両面は中央が窪む。両端部を欠損し、現況で5.2×4.0×2.0cmを測る。**70**は細身の鋸先状鉄器で、0.9×1.0×0.5cmの三角形鎌造りの刃部に、浅い闇を設けて長さ6.0cm径0.9cmの袋状の身部が統く。袋端部から6mm上に、3mm角で長さ1cm程の目釘が留まり、逆刺状になる。全長6.8cm13gを測る。**71**は径4~2.5mm、残存長で2.6cmを測る断面円形の針状鉄器で、釣針の身部の可能性もある。時期は中期後半。

5).柱穴出土遺物 柱穴は、時期を明確にできた該期のものだけで200弱を数え、多数にのぼること遺構の切り合いで多さで掘立柱建物を復原し得ない。ここでは柱穴から出土したおもだつた資料を報告する。

出土遺物(Fig.17) **72**は12グリッドSP3出土の有柄石剣の基部片。柄部は長さ2cm幅2.7cmと短く、両側を浅く抉って磨り取っている。転用の素材加工を施され、断面を縦二分割後剥離面と鎌の一部を細かく敲き減らし平滑に仕上げる。現況で5.3×4.0×0.6cmを測る。頁岩製。**73**はB5グリッ

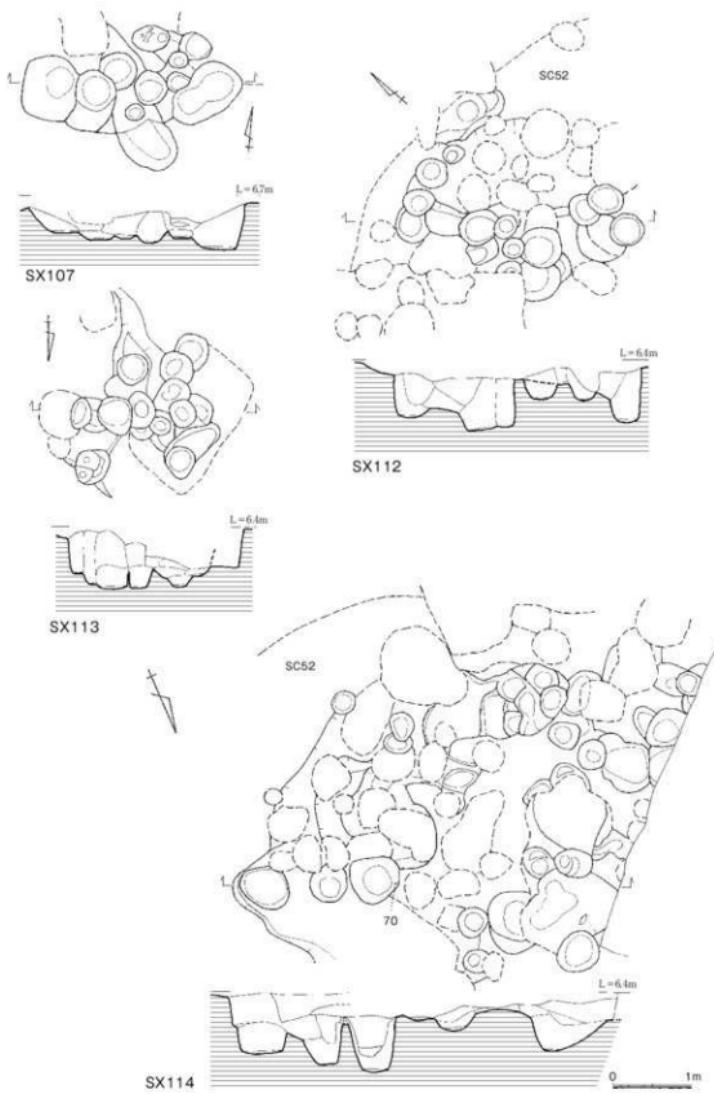


Fig.15 SX107·112·113·114実測図(1/60)

トSP4出土の石戈の鋒片で、72同様転用の素材加工を施し、磨製石鎌の作製途中である。両面の高い鎌部を細かく敲き、1cm前後の厚みを4mmまでに減じている。現況で4.1×2.3×0.4cmを測る。頁岩製。74はD1グリッドSP4出土の三角形無頭平基の磨製石鎌。鋒を欠くが現況で3.2×1.3×0.3cm 1.83gを測る。上半は鎌を立て矢柄に挟む下半は平坦に仕上げ、基部は台形に整形する。緑泥片岩製。75はH2グリッドSP1と4から出土した石包丁片で、13.0×4.9×0.6cmを測る。径5mmの紐掛け孔の間隔は2.3cm。磨製石鎌の素材として長さ4.3～2.7cmの4片に小割りされる。左の端部には敲打がなされ再加工が始まっている。凝灰質砂岩製。76はG4グリッドSP4出土の黒曜石核。厚2.72cmの角礫を用い3面に自然面が残る。長さ5.75幅4.27cmを測る。打面を整えず上下方向から剥片剥離を行っている。腰岳産で、前期からの混入。77は同柱穴から出土の砂岩製石皿の半折品。側面はやや粗い敲打で方形に整形し、平坦面両面を使用する。上面を主に使用し、同面で5、裏面で2mm中央が皿状に窪む。現況で17.9×12.1×3.0cmを測る。78はD1グリッドSP3出土の袋状鉄斧の袋部の小片を転用した刃器で、3.4×2.1×0.4cm 20gを測る。折り返しの端部を背部に、破断面を両刃に加工し小形の刃器としている。79はH6グリッドSP4出土の注口状の土製品の破損品で、現況で長さ2.2幅1.8高さ2.1cmを測る。中央に棒芯に粘土を巻いて整形後抜き取った径3mmの小孔があり、一見、紡錘形の管状土錘に見えるが、上縁を幅1cm程鰐鱗状に摘み出して整形した部分があり、小孔上の先端部に径2mm程の刺突を施して装飾化しており、土錘とは考えにくい。調整もケンマで精製品

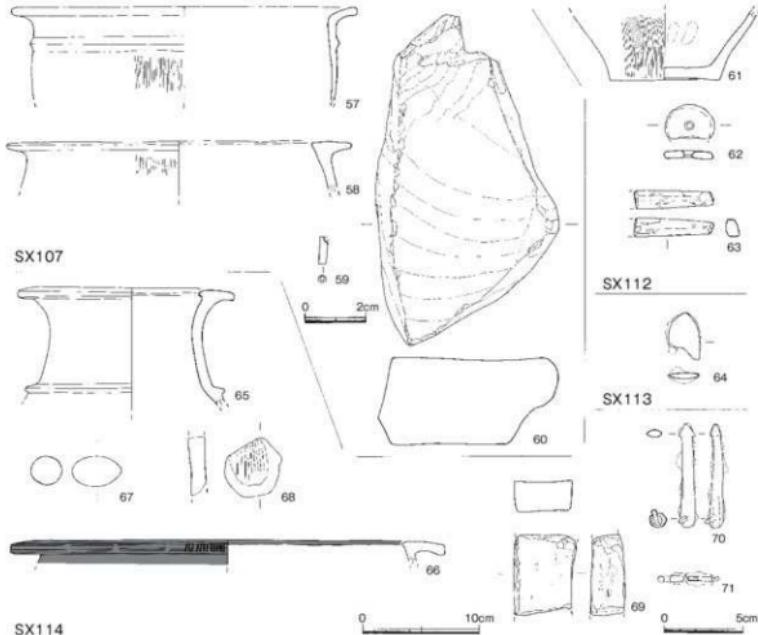


Fig.16 SX107・112・113・114出土遺物実測図(1/4・1/3・2/3)

である。暗褐色～黒褐色を呈する。80はC3グリッドSP8出土の費胴部片転用の紡錘車。半分欠損するが、径4.8cm厚3.5mmを測る。周縁を細かく打ち欠いて円形に整形し、中央に径4mmの軸受け孔を穿孔する。PL10-9はSC42内D5グリッドSP9出土の丹塗磨研袋状口縁壺の口縁で、口径10.4cm。袋部の湾曲・幅とともに大きめで、外面口縁下が段を成す。

6). その他の出土遺物 Fig.18は他時期造構への混入・搅乱他からの出土品。81～86は旧石器から繩文時代の石器。81はSE40混入の玄武岩製剥片尖頭器。縦長剥片素材で、 $9.91 \times 3.01 \times 1.51$ cm 20gを測る。厚い背部を主剥離面側から調整剥離を行い、同様に裏剥離面左刃部の二次調整を行う。打面の両側からノッチを入れ長さ1.5幅2.0厚1.4cmの基部を形成する。風化が進み稜線は緩い。82は搅乱検出のサヌカイト製尖頭器未製品。横長剥片素材で、 $9.5 \times 3.2 \times 1.2$ cm 21gを測る。背部には上方からの打面調整剥離が残る。下端の背部側から調整剥離を行い幅1.2cmの基部を形成する。裏剥離面左側線上に主剥離面側から刃部の二次調整を行うが、中央が大きく欠け完成を断念している。風化が著しく、黒色が表面は灰白色となる。88はSK76混入の玄武岩製の使用痕のある縦長剥片。剥片尖頭器の素材とし剥離されたが、折断したため断念し転用した可能性が高い。裏剥離面左辺に使用痕が残る。現況で $3.2 \times 4.1 \times 0.8$ cmを測る。83・84は黒曜石製の石刃核。83はSX113混入。 $2.24 \times 3.08 \times 1.88$ cmを測り、上面と両側面は自然面のまま、自然面の上方から連続剥離を行う。上面に1面残る剥離は風化がより進み他時期である。84はJ3グリッドSP4に混入。上面は一部に自然を残して打面調整を行い、側面にも調整剥離を施し方形に整形する。上面の短辺側から連続剥離を行う。 $2.11 \times 2.87 \times 2.20$ cmを測る。85・86は黒曜石製の石刃で、85はSE40に混入。先端を折損、両側に使用痕が残る。現況で長4.0幅2.2厚0.4cmを測る。86はSC19の混入品。上半を折損し、現況で長4.2幅1.5厚0.6cmを測り、両側に使用痕がある。87は搅乱検出のサヌカイト製楔形石器で、上下の表裏両面から調整剥離を施し整形する。 $2.5 \times 2.1 \times 0.8$ cmを測る。89・90は石鎌。89はSC5混入の打製品で、平坦に仕上げられた上下に両面剥離で刃部と背部を形成する。小割りされ方形の転用素材に加工。現況で長4.1幅4.1厚0.8cmを測る。頁岩製。90はSE12に混入。両端を欠損する磨製品の転用途中で、裏面と刃部に剥片剥離と敲打を施し厚みを減らす。最厚部は中央から左に寄る。現況で長8.8幅4.5厚1.1cmを測る。頁岩製。91はI～J5グリッド覆土出土の磨製偏平両刃石斧。鎌までの幅は7mmと短い。刃部左端を欠損。長6.2刃・基部幅4.1厚1.6cm 74gを測る。緑泥片岩製。92はSK77出土の凹石。今調査で多く出土する遺物で、礫岩の円礫を用いる。全面を叩きに用い、上面中央を径4cm深さ6mm窪む程集中的に使用。 $8.5 \times 6.8 \times 3.5$ cm 202gを測る。93はSX108出土の砂岩の円礫を用いた

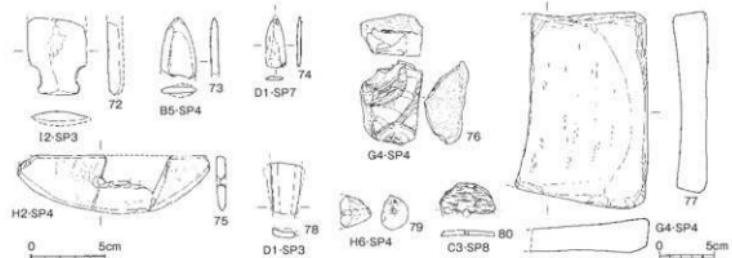


Fig.17 柱穴出土遺物実測図(1/4·1/3)

磨石。全面を磨りに用い、右側縁は叩きにも用いる。8.9×6.0×3.1cm 222gを測る。94はSX108出土、泥岩製の石錐未製品が多面砥石。紡錐形を呈し、両端を欠損。全周に10面の幅6~9mmの狭い研磨面がある。現況で5.7×2.1×2.0cmを測る。95はSC5混入の打製石斧未製品の凹石転用品。玄武岩の扁平礫の全周に、調整剥離を中途に施す。仕上げないまま上面中央を叩きに利用し、径4.6cm深さ3mm程が窪む。13..3×9.1×2.3cm 493gを測る。96は搅乱出土の前期窓で、口唇両端が肥厚し上端に刻目を施す。赤褐色を呈す。97はSK76出土の小形直口の鉢で、口縁下に突帶を1条、内外にナデを施す。復原口径6.4器高4.1cmを測る。橙色。98はD~E2グリッド覆土出土の土器片転用の紡錐車。半欠で、径3.1cm厚6mmを測る。周縁を敲打後粗く磨り円形に整形、中央に径3mmの軸受け孔を穿孔する。99~103は土製の投弾で本調査区で目立つ資料である。99はSK17出土。4.1×2.5cm 17gを測る。100はSC5に混入。3.9×2.1cm 14gを測る。101はSC91出土。3.5×2.0cm 13gを測る。102はSK48出土。4.3×2.5cm 25gを測る。103はSK84に混入。球形で2.7×2.5cm 17gを測る。

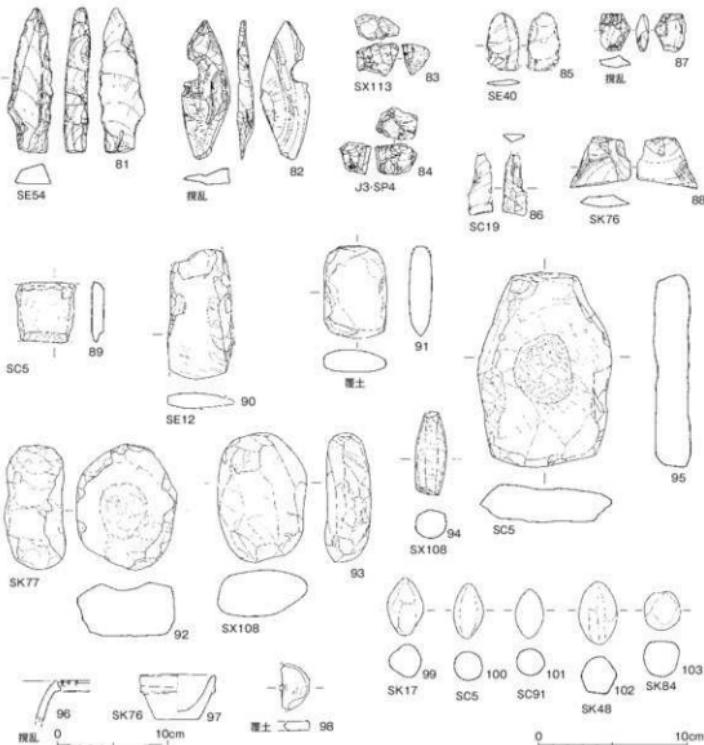


Fig.18 旧石器他出土遺物実測図(1/3・1/4)

3. 弥生時代後期の調査

後期の遺構は、竪穴住居4軒・井戸3基・土壙8基・溝1条を検出した。全体の15%程度で集落の縮小期にある。敷地内では本調査区が多い様に見えるが、該期の柱穴まで明記したため、90・102次の柱穴の選別は行っていない。住居群は本調査区南部から70次調査区にかけての南部に中心があり、これを囲むように、本調査区の北側で3基、南部の70次調査区で1基の井戸が検出される。

1). 穴式住居 穴式住居は中期の1/3に減少するが、調査区の南部で4軒検出した。全て方形プランで、方向もほぼそろっている。

SC53 (Fig.20PL4-1) H4グリッドに位置し、やや四辺形に歪んだ方形プランでSC52を切る。5.14×4.25m深さは14cm程を測り、幅5～20cm程の細い壁溝が巡る。方位はN-40°-Wに近く、柱穴は西側に径30～60cm程のものが無規則に分布し、主柱穴は明確にし得ない。床面中央部は擾乱を受けてはいないが、中央で灰は検出されない。遺物はコンテナ1/2分出土しているが9割方は中期遺物である。



Fig. 19 滋生後期造構分布図(1/400)

出土遺物(Fig.21) 104は甕の底部片である。復原底径5.2cm。底部脇のくびれは無く直線的で、際は丸くなりレンズ底化の兆しが見える。色調は鈍い浅黄色を呈す。後期前半。

SC68(Fig.20 PL4-2・3) K2グリッドに位置し、方形プランの一部の検出で、大部分は北の調査区外に広がる。方位はN-19°-W。残存で3.94+ α ×1.64+ α m深さ20cmを測る。壁溝は持たない。小範囲のため主柱穴は判然としない。土層はGL-20cmまでが現代客土(a層)、35cmまでが暗黄褐色旧耕作土(3層)、45cmまでが暗褐色覆土(6層)、以下東側で地山ブロックを多量に含む暗灰褐色土の貼床(7層)となり、東側の床上20cm程に土器片が密集する。遺物はコンテナ1箱分出土した。

出土遺物(Fig.21) 105は甌の底部で、底径6.2cm。底部際から体部は緩く張り、底部際のぐいれは数mmと形骸化する。外面はタテハケを施す。106は広口の壺で復原口径25.2cm。緩く外反する口縁から頸部に稜を持たず胴が強く張る。口唇は面取りし内外はヨコナデ、外面頸部以下にタテハケ、内面頸部以下にヨコハケを施す。鈍い橙色を呈する。107は支脚脚部で、復原径8.6cm。外外面にナデ、内面端部にケズリ様の粗いヨコナデを施す。浅黄色を呈する。108は花崗岩円礫を用いた打ち欠き石錘。8.3×6.4×3.8cm 285gの円礫の両側

中央を打ち欠いて紐掛けを形成し、上下両端は叩石として用い、敲打痕が残る。後期前半。

SC94 (Fig.20) E7グリッドに位置する方形プランの住居で、SC95と切り合い、大部分を搅乱に切られる。方位はN—4°—Wにくる。残存で $2.16+\alpha \times 1.40+\alpha m$ 深さ12cmを測る。壁溝は持たない。小範囲のため主柱穴は明確にできない。遺物は少量出土した。

出土遺物 (Fig.21) 109は「逆く字」の二重口縁壺で、屈曲部径で22.2cmを測る。口縁上半は緩く内湾し、外面屈曲部に面取り、以下に粗いタテハケを施す。鈍い黄色を呈する。後期前半～中頃。

2).井戸 竪穴住居群の東側で、弥生中期井戸の水脈に沿う様で3基中2基が同一線上に位置する。

SE12 (Fig.22 PL4-4・5) E3グリッドに位置する。円形プランで、上端で径1.02m、断面は直線的で、底面は径77cmの円形となり、底面は5cm程窪む。深さは2.54m。GL-1.2m程まで暗灰褐色土が堆積し（上層）、以下底面附近まで地山ブロック混じりの同土で埋め戻され、底面上には粘質土が堆積する（下層）。遺物は総量でコンテナ3箱分出土した。

出土遺物 (Fig.23・24) 110～112は上層出土。110は復原口径15.6cmの甕。口縁が「く字」に湾曲し、内面に若干稜をなす。口唇は浅く窪み、外面に粗いタテハケ、内面口縁にヨコハケ以下にタテハケを施し、口縁内外をナデ消す。鈍い橙色。111は丸底の鉢ではば完形。口径15.4器高6.5cm。口縁

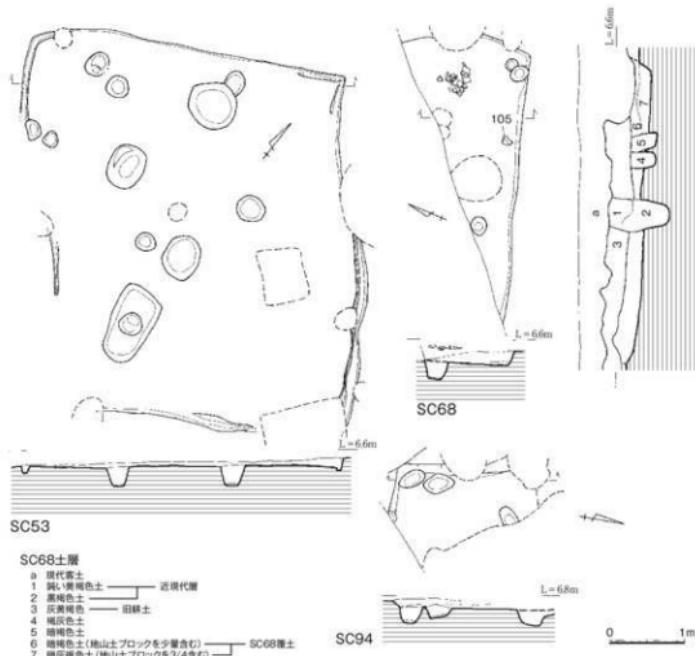


Fig.20 SC53・68・94実測図(1/60)

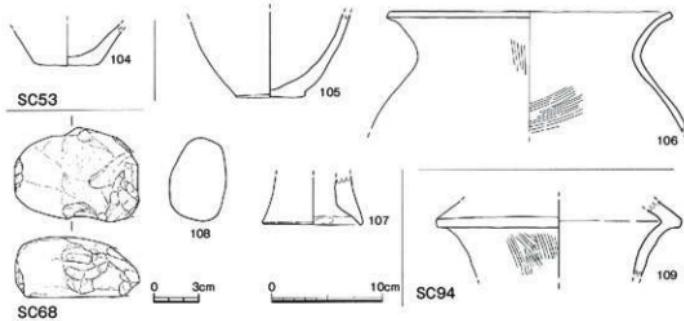


Fig.21 SC53-68-94出土遺物実測図(1/4-1/3)

端部は丸く仕上げる。橙色。112は大形紡錘形の管状土錐半折品。孔径6mm径3.8cmを測る。113～124は下層出土。113はほぼ完形の「逆く字」の二重口縁壺で、底面近くで破碎した状態で出土。口径21.2胴径25.9器高35.4cm。口縁屈曲部は稜を成し、上位は緩く外湾して内傾、端部は肥厚する。外面頸部下に三角突帯を、胸部中位下に四角突帯を1条施し、これに疎らな刻目を施す。底部脇のぐびれはごく小さく、薄い平底で底部際は丸い。口縁内外にヨコハケ後ヨコナデ、外面頸部はタテハケ以下に粗めの左上がりのナナメハケを、内面径部と胸部にナナメハケ径部下端にヨコハケを施す。浅黄色。114は口縁上半が緩く内湾する「逆く字」の二重口縁壺で、復原口径18cm。屈曲部は小さく突出し面取り。口唇は面取りし肥厚。外面にナナメハケ、屈曲部と口唇から内面にヨコナデを施す。浅黄色。115

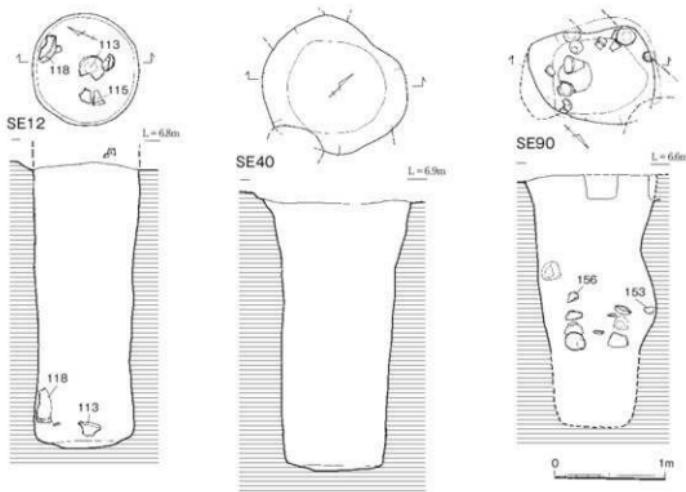


Fig.22 SE12・40・90実測図(1/40)

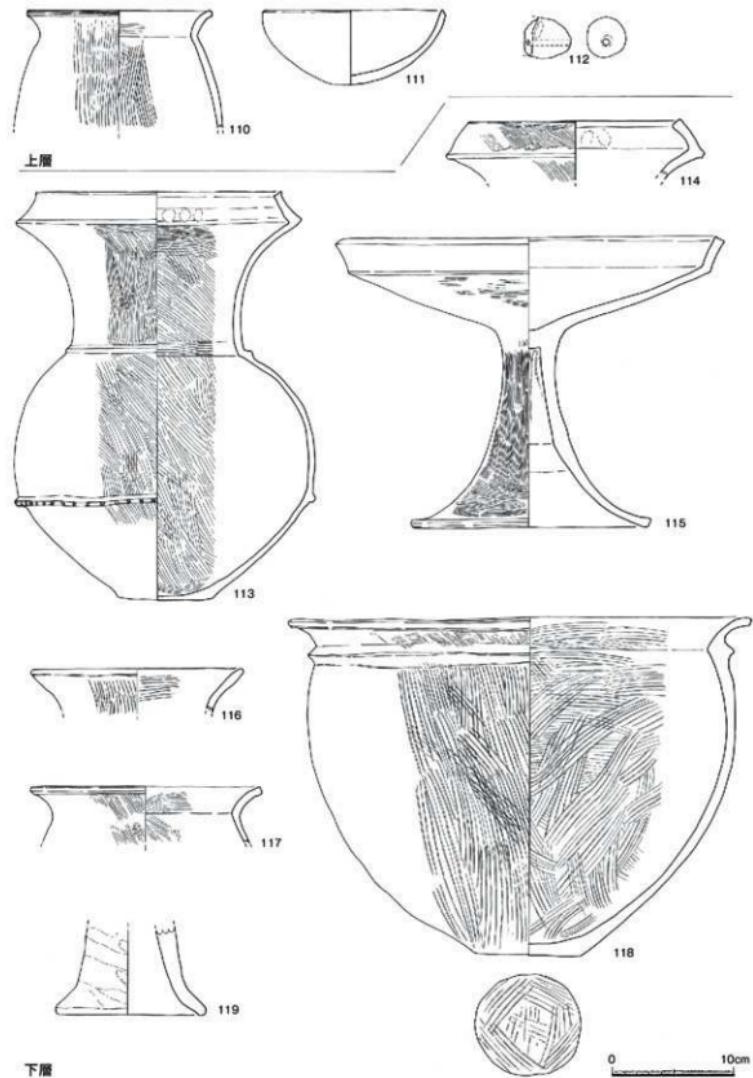


Fig.23 SE12出土遺物実測図.1 (1/4)

は体部が上位1/3程で屈曲し、口縁が緩く外湾してやや外方に開く高杯で、底面近くで破碎して出土。復原口径31.8器高25.1cm。口唇は面取りし内端が突出。体部外面はヨコハケ後ナデ消し、脚部上位にタテハケ後下位にヨコハケを施す。脚端部は浅く窪む。橙色。**116**は緩く外反する壺口縁。口唇は丸く仕上げ下端が沈線状に窪む。外面に粗いタテハケ内面にヨコハケを施す。**117**は「く」字口縁の甕で内面が棱を成す。口唇を浅く窪ませ以下の外面にナナメハケ、口縁内面にヨコハケ以下にナナメハケを施す。復原口径19.4cm。鈍い黄色。**118**は「く」字口縁の甕で、底面近くで破碎した状態で出土。復原口径37.2器高29.3cm。口縁は緩く外湾し端部は浅く窪める。外面口縁下に低い三角突帯を1条施し、丸い体部から若干くびれる薄い平底に連なる。外面口縁下には細かなタテハケ、以下に粗いタテハケ、外底にも舟形に施す。口縁内面から胴上半はヨコハケ、以下にナナメハケを施す。明赤褐色。**119**は支脚の脚部。復原径12.2cm 端部から2cm程上位で湾曲し直線的に延びる。外面にはケズリ様の

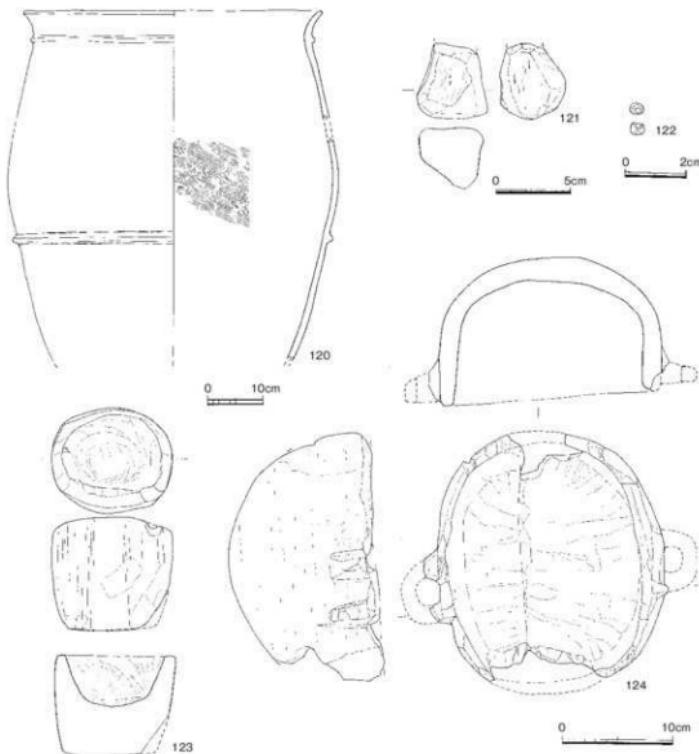


Fig.24 SE12出土遺物実測図.2(1/8・1/4・1/3・2/3)

粗いナナメナデ、内面は被然で器面が爆ぜる。褐色。**120**は大形の甕で、全周の1/3程が破碎して出土。口縁は外湾し、胴が張り口縁下と同中位下に四角突帯を1条施す。内面にナナメハケが残る。復原口径53.6胴径59.8cm。鈍い橙色。**121**は側面の4面を使用した砥石の端部片で、使用で中央が窪み狭部で折損。折損後一部を敲打に用いる。残存で5.1×4.9×4.0cm。砂岩製。**122**は明青色透明のガラス小玉。径4長4孔径2mm0.65g。**123**は底面附近出土の小形木製容器の未製品。径11高さ9cmの広葉樹の柾目取り材の内側を、径9.1深さ4.6cmまで抉ったところで廃棄している。内面はケズリ痕が残る。**124**も底面附近出土の木製釣瓶で、口縁の両側に幅6cm前後の紐掛けの痕跡がある。径24.5×27cm厚13.5cmの広葉樹板目取り材から紐掛けと半球形の体部を削り出す。内面を長径22短径17.5深さ11cm程くり込み平滑に仕上げる。使用により紐掛けの直交方向の口縁と紐掛けが欠損したため廃棄したと考えられる。後期前半。

SE40(Fig.22) B4グリッドに位置する。円形プランで、上端で径1.3m、断面はGL-80cmまでややすぼみ以下は直線的。底面は90cmの円形となり5cm程窪む。深さは2.54m。上半に地山ブロック混じりの暗灰褐色土が(上層)、以下粘質土が堆積する(下層)。遺物はコンテナ3箱分出土した。

出土遺物(Fig.25) **125～128**は甕。**125**は「逆く字」の二重口縁甕で、復原口径19.4cm。口縁上半は緩く内湾し、外面下位に細かなタテハケ。鈍い黄色。**126**は胸部中位下に低い四角突帯を1条施し、底部脇のくびれはごく小さい平底で復原底径7.0cm。外面突帯下に細かなタテハケ。橙色。**127**は復原径9.3cmの底部片で、大きく張る胴からごく小さなくびれの、薄い底部に連なる。際は丸くレンズ底化の兆しがある。外面に細かなタテハケ、外底に舟形の粗いハケを、内面は粗いヨコ・ナナメハケ。鈍い橙色。**128**は強く張る胸部からくびれる底部へと連なり、際は丸くレンズ底化の兆候がある。復原径8.4cm。鈍い橙色。**129・130**は甕。**129**は口縁が若干内湾して「く字」に屈曲し、内面は稜を成す。口唇は丸く仕上げ、外面口縁下に小さな三角突帯を、内外にヨコナデ。橙色。**130**は復原口径18.4cmの「く字」口縁で、内面は稜を成し胴は強く張る。胴部内面にナナメハケが残る。鈍い橙色。**131・132**は小形丸底の壺。**131**は復原口径11.2cm。浅い胴から頸部で稜を成して屈曲し口縁

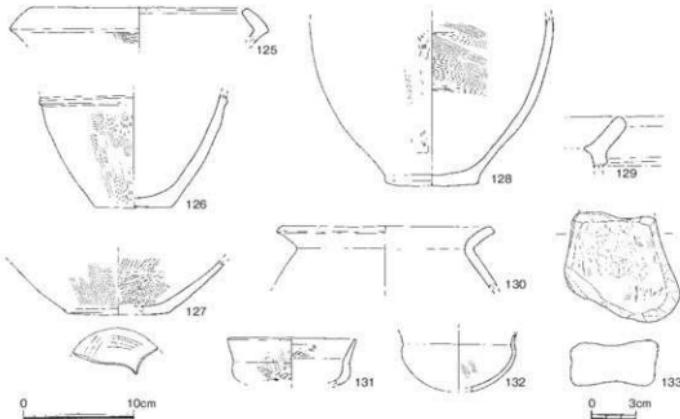


Fig.25 SE40出土遺物実測図.1(1/4・1/3)

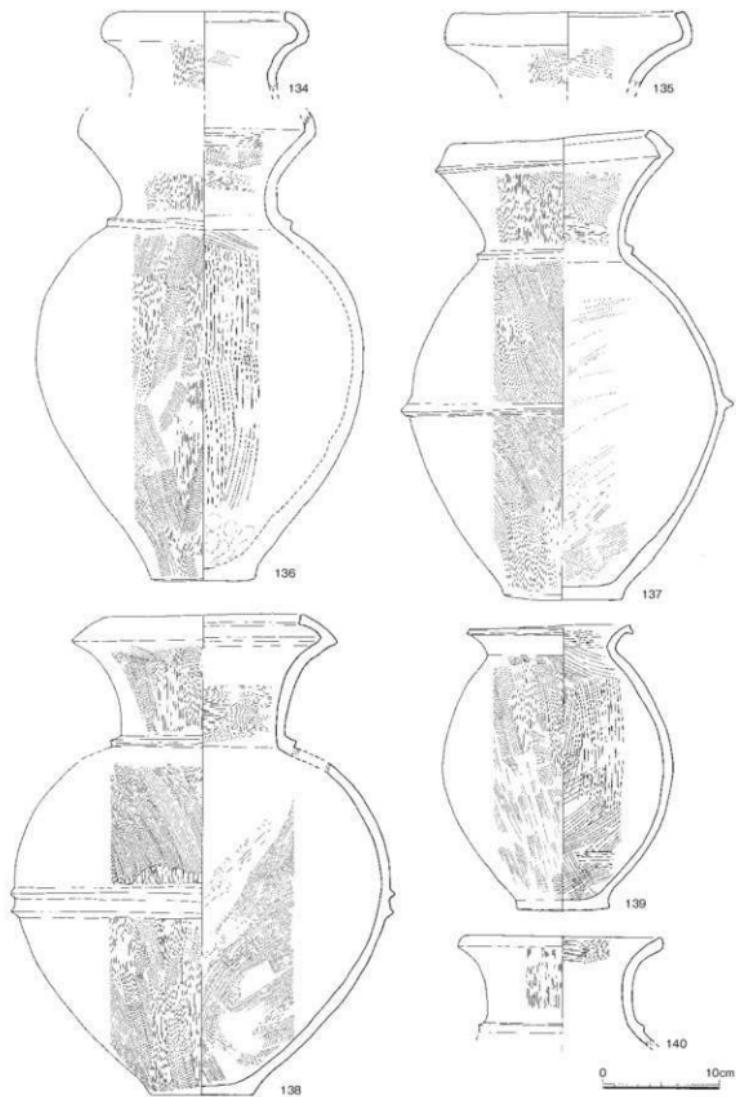


Fig.26 SE90出土遺物実測図.1 (1/4)

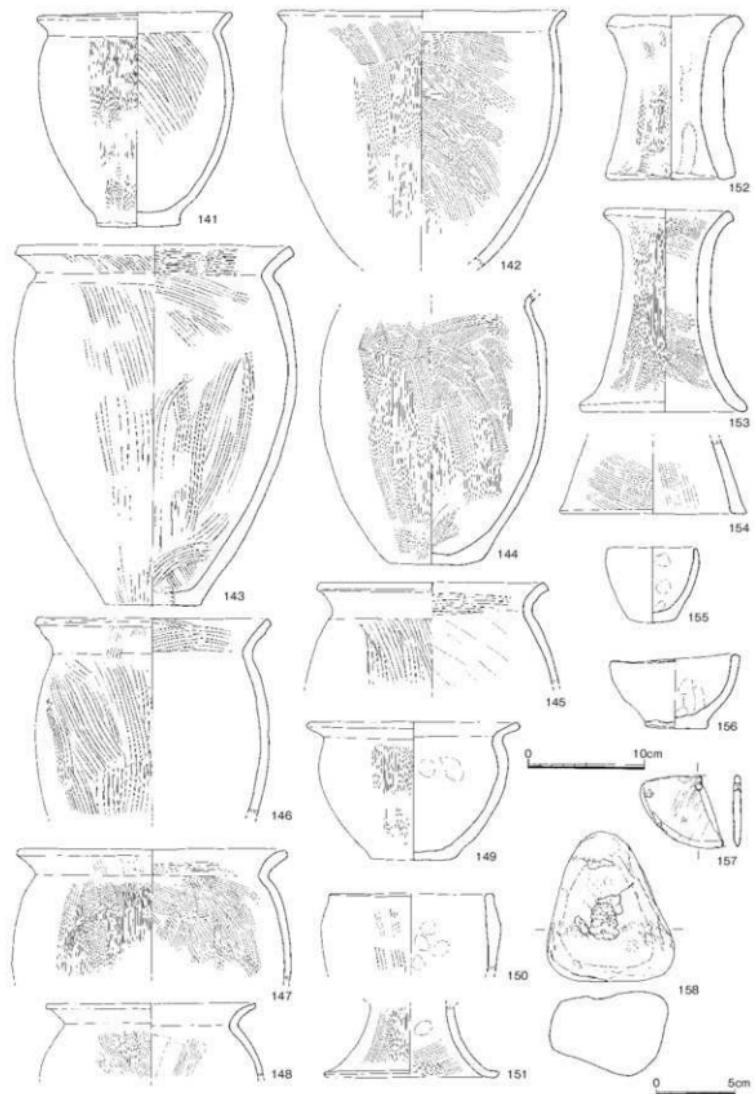


Fig.27 SE90出土遺物実測図.2(1/4・1/3)

は直線的に外反。外面口頭部に細かなタテハケ胴部に不定方向ハケ、口縁内面にヨコハケを施しこれをナデ消す。橙色。**132**は頭部以下の小片で、深めの胴から頭部で稜を成す。胴内面に細かなハケメが若干残る。浅黄色。**133**は凹石の半欠品で、上下面を中心に全面を磨りと叩きに用い、上面中央を径3~4cm深さ3mm窪む程集中して用いる。砂岩製。後期初~前半。

SE90 (Fig.22 PL4-6・5-1) G6グリッドに位置する隅丸方形プランの井戸で、SE89を切る。上端で1.28×0.94mを測り、断面はGL-1.2m前後が抉れ土器が密集する。調査最終日まで作業にかかった井戸であったため、土器溜まり以下の断面は重機で断ち割って確認している。深さは2.25mを測る。壁面中位に径15~20cm前後の足掛かいを数枚所配置する。遺物はコンテナ7箱分検出した。

出土遺物 (Fig.26・27) **134~140**は壺。**134**は袋状口縁壺で、復原口径14cm。外面下方に稜線化の兆しがある。外面頭部に細かなタテハケ、内面にナナメハケを施しナデ消す。鈍い橙色。**135**はより稜線化が進んだ袋状口縁壺で復原口径19.8cm。口縁上半が大きく開き、口縁内外面はヨコナデ、以下の外面上に細かなタテハケ、内面に粗いヨコハケ。鈍い橙色。**136**は胴部径29.3器高40.7cm。口縁は打ち欠き、破片の一部が接合する。口縁は**136**に近く、屈曲部内面は稜線化。頭部下に三角突帯を1条施し、胴の最大径はやや上位。底部は平底で脇のくびれも明瞭。外面頭部以下に細かなタテハケ、内面頭部にヨコハケ胴部に粗いタテハケ。浅黄色。**137**はほぼ完形の二重口縁壺で、口径17.0胴径26.8器高40cm。口縁上半は緩く内湾し端部は面取り。屈曲部外表面は小さく突出し内面は稜線化。頭部下と胴中位の最大径部に三角突帯を1条施し、広く薄い平底脇のくびれは明瞭で、際は丸くレンズ底化の兆しがある。口縁内外にヨコナデ、外面頭部以下にタテハケ、内面頭部にヨコハケ胴部にナナメハケを施しこれをナデ消す。浅黄色。**138**は胴部の1/2を欠く二重口縁壺で、口径19.0器高42cm。口縁の屈曲は強く上半は緩く内湾。頭部下に1条、球形の胴部最大径下に2条の三角突帯を施し、薄い平底脇はくびれる。口縁内外にヨコナデ、外面頭部以下にタテ・ナナメハケ、内面頭部下位にヨコハケ胴部にナナメハケ。橙色。**139**は広口短頸の壺で胴部の一部を欠く、口径13.1器高24.7cm。「く字」口縁端部は肥厚する。胴が強く張りやや下方に最大径。平底脇のくびれは明瞭。口唇から口縁外表面はヨコナデ、以下に細かなタテハケ、口縁内面に粗いヨコハケ以下にタテ・ナナメハケ。褐灰色。**140**は復原口径16.9cm。口縁は緩く外湾し頭部は稜を成さず、張る胴に連なる。頭部下に三角突帯を1条、外面頭部に細かなタテハケ、内面上位にヨコハケ。橙色。**141~148**は甕。**142・144・145~148**は口縁内面の稜が緩く、他は「く字」口縁で内面は稜を成す。**141**はほぼ完形の甕で口径16.5器高15.5cm。口縁内部は明瞭な稜を成す。胴の張りは緩く最大径は上位。底部脇のくびれも明瞭。口縁内外はヨコナデ以下の外面上に細かなタテハケ、胴部内面に粗いナナメハケ。褐灰色。**142**は復原口径24.2cm。口縁内部の稜は緩く、胴も強く張らず最大径は上位。口縁内外はヨコナデ、以下の外面上にタテ・ナナメハケ、胴部内面にナナメハケ。鈍い橙色。**143**は復原口径23器高31.3cm。口縁内部は稜を成す。胴の張りは緩く最大径は上位。底部脇のくびれは緩い。口縁外表面は粗いナナメハケ以下にタテハケ、口縁内面にヨコ、以下にタテ・ナナメハケ。褐色。**144**は口縁と胴部の1/3を欠く。胴径19.5cm。口縁内部は稜を成さず、胴も強く張らず最大径は上位。底部脇のくびれは無く、際は丸く仕上げレンズ底化が始まる。胴外面上にやや粗めのタテハケ、内面上半にヨコ、以下にタテ・ナナメハケ。褐灰色。**145**は復原口径19cm。口縁内部の稜は緩く胴の張りは強い。口縁内外はヨコナデ、以下の外面上に粗いタテハケ、口縁内面にヨコハケ。鈍い黄色。**147**は復原口径22cm。口縁内部の稜は緩い、胴はやや張り最大径は上位。口縁外表面はタテハケ内面はヨコハケ後ナデ消し、以下の外面上にタテハケ、内面上に不定方向の粗いナナメハケ。

メハケ。鈍い黄色。**148**は復原口径19.8cm。口唇は面取りし、口縁内端は浅く窪める。胴は強く張り最大径は上位にある。口縁内外面はヨコナデ、以下の外面にタテ・ナナメハケ、内面にナナメイタナデ。鈍い黄色。**149・150**は鉢。**149**は復原口径17.7器高12cm。「ぐ」字口縁で、内面の稜は緩い。上位で胴がやや張り底部脇のくびれは緩い。際は丸く仕上げる。口縁内外面はヨコナデ、以下の外面に細かなタテハケ、胴部内面はナデ。鈍い橙色。**150**は直口でやや内傾。復原口径12.6cm。口唇は面取りし口縁下が肥厚。胴の張りは緩い。外面は粗いタテハケ、内面にナデ。橙色。**151**は肥後系脚付甕の脚部とおもわれ、復原径14.8cm。端部はやや強く外方に屈曲し、端面を浅く窪め、外面に細かなタテハケ、内面下位にヨコハケ。鈍い黄色。**152**は支脚、復原口径10.6器高14.2cm。器壁が厚く、外面に雑なタテハケ、内面に粗いタテナデを施しボリ痕が残る。橙色。**153**は筒型器台。ほぼ完形で口径10.3器高17.6cm。外面に細かなタテハケ、内面にナナメハケ。橙色。**154**は体部が直口のやや大形の筒型器台。復原径16.1cm。外面にナナメハケ、内面にタテハケを施しナデ消す。褐灰色。**155・156**は小形の鉢で、**155**は復原口径7.3器高6.5cm。口縁部が若干内傾し、底部は緩いレンズ底を成す。内外にナデ。黒褐色。**156**は完形で、口径9.5器高6.5cm。底部脇はくびれ平底を成す。内外にナデ。橙色。**157**は石包丁片で、径4mmの紐掛け孔で破断し転用素材となる。残存で $5.3 \times 4.7 \times 0.5$ cm。紫灰色の凝灰質砂岩製。**158**は凝灰岩の円礫を用いた凹石で、全面を磨りと叩きに用い、上面中央を径2.5～3cm深さ3mm窪む程集中して用いる。後期初～前半。

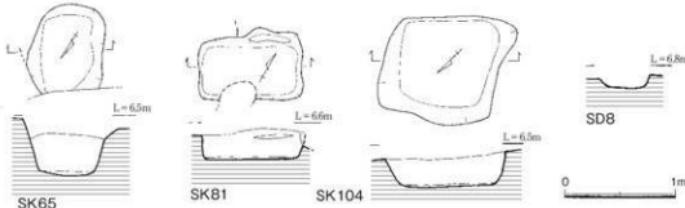


Fig.28 SK65-81-104 SD8実測図(1/40)

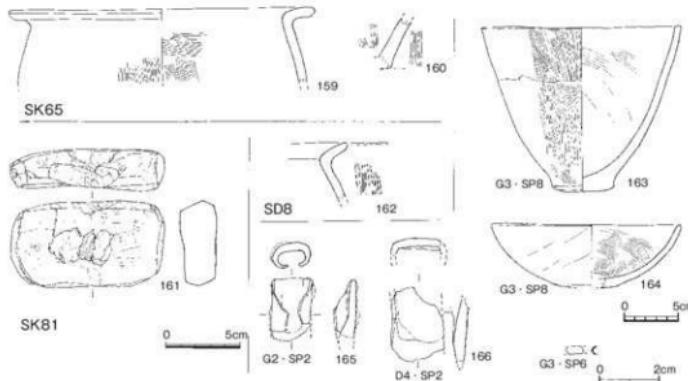


Fig.29 SK65-81-SD8・柱穴出土遺物実測図(1/4-1/3-2/3)

3).土壤 土壙は堅穴住居の周辺で8基検出した。中期の1/3以下の基数となる。

SK65(Fig.28) L2グリッドに位置する。隅丸長方形のプランで一部が調査区外にのびる。現況で $0.78+\alpha$ $\times 0.68m$ 深さ53cmを測る。覆土は黒灰色土で、GL-10~30cm間に地山ブロック混じりの黒灰色の客土層をはさむ。遺物は数十片出土した。

出土遺物(Fig.29) 159は甕で、内面に稜は無い。復原口径25cm。口唇は丸く仕上げ内外面をヨコナデ、胴外面にタテハケ内面上位にヨコハケ以下にタテハケを施す。鈍い橙色を呈す。160は甕底部片。底は薄く脇は直線的で、内外面にタテハケを施す。鈍い橙色を呈す。後期初頭。

SK81(Fig.28) H6グリッドに位置する方形プランの土壙で、SC85に切られる。 $0.85 \times 0.68m$ 深さ24cmを測る。遺物は少量で中期が多く、内面にハケメを施す土器片が少量出土した。

出土遺物(Fig.29) 161は砂岩の扁平礫を用いた凹石で、全面を磨りと叩きに用い、上下面中央を径2.5~4.5cm深さ2~3mm窪む程用いる。 $10.5 \times 5.9 \times 2.5cm$ 重さ294gを測る。

SK104(Fig.28) H4グリッドに位置し、SC53の屋内土壙の可能性もある。隅丸方形のプランで $1.1 \times 1.0m$ 深さ34cmを測る。遺物は図化に耐えない後期土器片を少量含んで数十片出土した。

4).溝 溝はSC5に切られるSD8を検出したのみである。

SD8(Fig.28) E3グリッドに位置する。幅45深さ10cm前後を測る小溝で、直線的にのびる3.6m分を検出したのみで、底面は北東に下がる。方位はN-E -53° に於ける。遺物は数十片出土した。

出土遺物(Fig.29) 162は「ぐ字」口縁の甕で、内面が稜を成す。口唇は丸く仕上げ胴が強く張り、外面に粗いタテハケを施す。明褐色を呈す。後期前半。

5).柱穴出土遺物 柱穴は、時期を明確にできたものだけで60前後を数えるが、これも中期の1/3以下となる。該期の柱穴から出土したおもだつた資料を報告する。

出土遺物(Fig.29) 163はG3・SP8出土の甕底部。復原底径5.6cm。底は厚く脇のがぶれも明瞭だが際は丸く仕上げレンズ底化が始まる。外面に粗いタテハケ内面にナナメハケ後ナデ消す。上縁の破断面を丸く磨り鉢に転用された可能性がある。鈍い橙色。164は同柱穴出土の鉢。復原口径16cm。底面は稜を成して丸くなる。内外面にナナメハケ後外面はナデ消し。黄灰色。165はG2・SP2出土の袋状鉄斧の袋部残片。 $4.3 \times 2.7 \times 1.5cm$ 内径で $1.9 \times 0.9cm$ 重さ20g。刃厚は10mm程。166もD4・SP2出土の袋状鉄斧の断片。 $5.0 \times 3.7 \times 0.8cm$ 内径で $3.0cm$ 重さ37g。他に小片が1片ある。刃厚は10mm程。167はG3・SP6出土の青色ガラス管玉の破片で、銀化が進み殆ど灰白色。長さ6mm径2.5cm内径1.5mm。

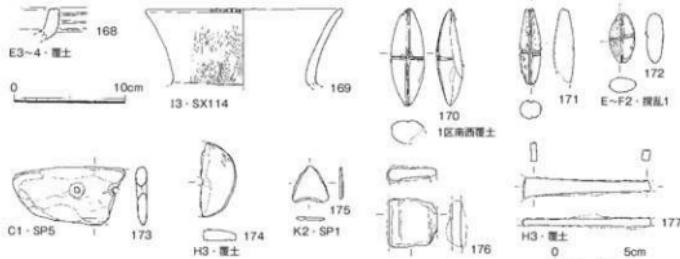


Fig.30 その他の後期出土遺物実測図(1/4-1/3)

6).その他の出土遺物 Fig.30は混入・搅乱他からの出土品。**168**は近畿系の高坏小片。稜を成さず屈曲する口縁外面に3条の平行沈線を施す。砂粒を多く含み橙色。**169**は広口壺。復原口径17.2cm。外面にタテハケ口唇外面に刻目を施す。鈍い黄色。**170～172**は縦横に溝を刻む紡錘形の九州型石錘。**170**は断面円形に全面を研磨、幅2mm程の溝を磨つて刻む。6.5×2.2×1.6cm26g。灰色泥岩製。**171**は断面円形に、端部に5mm程の平坦面をつくる。横の溝は2条巡る。5.1×1.4×1.2cm10g。灰色泥岩製。**172**は3.4×1.7×1.1cm9g。断面は扁平で緑泥片岩製。**173**は石包丁。孔で破断し、長7.6幅3.9厚0.7cm孔間隔2.6cm。緑泥片岩製。**174**は滑石製紡錘車。径2.4cmの円形で下面を平坦に、4mmの斜めに面取りする端部から中央に7mmと厚みを増す。軸孔は径5mm。全面に研磨。**175**は頁岩製三角形凹基の磨製石鐵。長2.3幅2.4厚0.2cm3g。**176**は鋳造鉄斧袋部の断片。3.3×3.2×0.7cm内径2.1cm26g。破断面を磨っている可能性がある。**177**は鉄器断片で上下端部を欠損。断面四角形で長8.6、上端で幅1.25厚0.4cm下端で幅0.7厚0.55cm27g。上端部が薄く広がる。アワビオコシカ。



Fig.31 弥生終末～古墳前期遺構分布図(1/400)

3. 弥生終末～古墳前期の調査

該期の遺構は、堅穴住居8軒・井戸2基・土壙25基・溝2条を検出した。全体の4割近くを占め中期に次ぐ集落の拡大期にあたる。敷地内では住居群は本調査区西部から70次調査区東部の、東西幅30mの範囲に18軒集中する。方位も近い。井戸はこの集落幅の東西端あたりに分布する。

1) 穫穴住居 穫穴住居は中期の2/3程に回復し、調査区西部で8軒検出した。全て方形プランで、方向は大部分そろう。

SC5 (Fig.32 PL5-2~6) F3グリッドに位置する。方形プランでSC6・10を切る。3.78×3.5m深さは26cmを測り、SC53同様幅5~10cm程の細い壁溝が巡る。方位はN=16°~Wにとる。主柱穴は隅近くの、掘方径60~70cm程のものが柱間1.9~2.7m程の4柱になるとと思われる。柱痕跡は径20cm程。F3・SP7内には底面近くに粗砂が5cm程堆積する。床面中央部には78×46cm深さ5cm程の方形土壙があり、炭粒混じりの暗茶灰色土で埋まり、底面が径20cm程円形に焼けている。地床炉と思われる。遺物はコンテナ5箱分が、大部分床から10~20cm浮いて、南部と北部に個体が始まとまっている。

出土遺物 (Fig.33) 178は住居南部部で検出された直口の短頸壺で、復原口径11cm高29cmを測る。口唇由外端部を浅く窪める口紐が、頸の筋

を成して屈曲し、下方がややすぼまる球形の胴部に連なり、底部は丸底となる。口縁外面に粗いタテハケを施し下半はナデ消し、胴部外面の上位にタテハケ以下にナナメハケを施す。鈍い橙色を呈する。**179**は**178**とともに検出された壺で、口縁を欠くが同形と思われる。胴はやや長胴化し完全に球形化する。最大径は中位やや下にあり、復原胴径27.8cmを測る。内外面に粗いナナメハケを施す。橙色を呈する。**180**はやや広口の壺。復原口径15.2cmを測る。丸く収めた口唇の口縁外面に粗いタテハケを施し下半はナデ消す。明橙色を呈する。**181**は「く字」口縁の大形甕口縁部。若干内溝し内面は緩い稜を成す。口縁下に低い断面四角突帶を貼付しナナメ刻目を施す。鈍い橙色を呈する。**182**は「く字」口縁の甕口縁部。復原口径は15.8cmを測る。口唇は面取りし内端が若干突出する。内面は稜を成さない。橙色を呈する。**183**は庄内系小型器台の脚部。復原径10.9cmを測る。内外に細かなナナメハケを施し、中位に円形の透かし孔を設ける。明橙色を呈する。**184**は上位で湾曲する筒形容器台口縁部で、浅く窪めた口唇に刻目を施す。復原口径13.6cmを測る。鈍い黄色を呈する。**185**は山陰系の低脚壺の脚部。復原径13.4cmを測る。外面に細かなヨコハケを施し、中位に円形透かし孔を設ける。鈍い黄橙色を呈する。**186・187**は高环の坏部。**186**は体部1/3程の下位で稜を成して屈曲し口縁が緩く外湾して外に開く。復原口径21.2cmを測る。鈍い黄橙色を呈する。**187**はさらに下位で屈曲し、口縁が直線的に開く。復原口径23.2cmを測る。明橙色を呈する。ともに調整不明。**188**は柳葉形の無闇有茎鉄錠で、鋒を欠く。現況で3.9×2.1cm刃部で厚4mm中茎で7mmを測る。8g。後期が一部混入するが、弥生終末～古墳初頭を示す。

SC18 (Fig.32 PL6-1) E2グリッドに位置し、大部分を擾乱とSC22に切られる。方形プランで殆ど壁溝と床面が残るのみである。 $2.12 + \alpha \times 1.92 + \alpha m$ 深さは6cm程を測る。方位はN-77° -Wにとる。壁溝は幅15～30cm、柱穴は壁から1.3m離れた位置に1穴のみ確認される。遺物は内面にハケメを施す壺が2片出土したのみである。弥生終末～古墳初頭と考えられる。

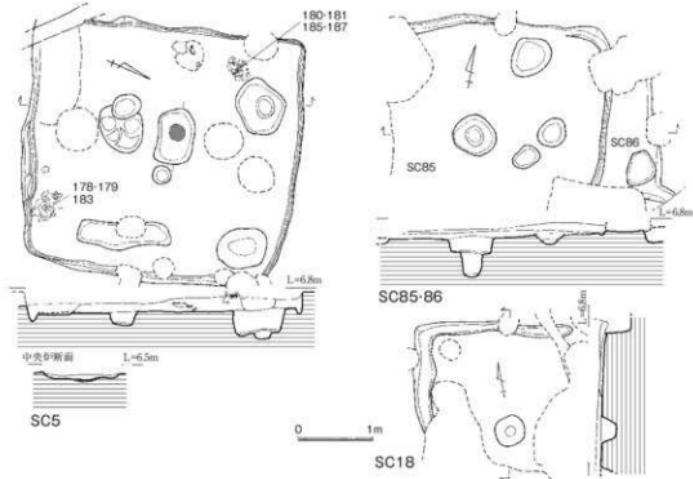


Fig.32 SC5-18-85-86実測図(1/60・1/40)

SC85・86 (Fig.32 PL6-2) H6グリッドに位置する。方形プランで86は85に大部分切られる。東部は覆土が重なり不明瞭であった。SC85は現況で $2.94+\alpha \times 2.48+\alpha$ m深さは18cmを測り、幅8~15cm程の細い壁溝が巡る。方位はN-2°-Wにとる。主柱穴は壁から1.6m離れた位置にあり、柱痕跡は径22cm程。炉の有無は不明。SC86は、SC85の東に重なる一辺2m前後と考えられる小型の住居で、現況で $1.45+\alpha \times 0.8+\alpha$ m深さは10cmを測る。南東隅から南壁の延長で、床と同レベルの幅20cm程の溝が屋外に延びる。方位はN-8°-Wにとる。主柱穴は不明。遺物は両住居を同時に取り上げており、中期土器を中心に西新町式期の破片が少量出土している。

出土遺物 (Fig.33) 189は泥岩の扁平碟を用いた手持ち砥石で、全面を砥面に用いる。 $5.3 \times 2.5 \times 0.8$ cm 10gを測る。弥生終末～古墳初頭と考えられる。

SC19 (Fig.34 PL6-3～5) D2グリッドに位置する。方形プランでSC22・SK56を切り、大部分がSC22と重なる。 $4.0 \times 3.64+\alpha$ m深さは4cmを測り、幅12~22cm程の細い壁溝が巡る。方位はN-27°-Wにとる。柱穴は東半部で10穴程検出したが、主柱穴は隣近くのものが組むと思われる。床面の大部分はSC22の覆土で、床上に多量の土器片が中央に散布してコンテナ2箱分が検出された。

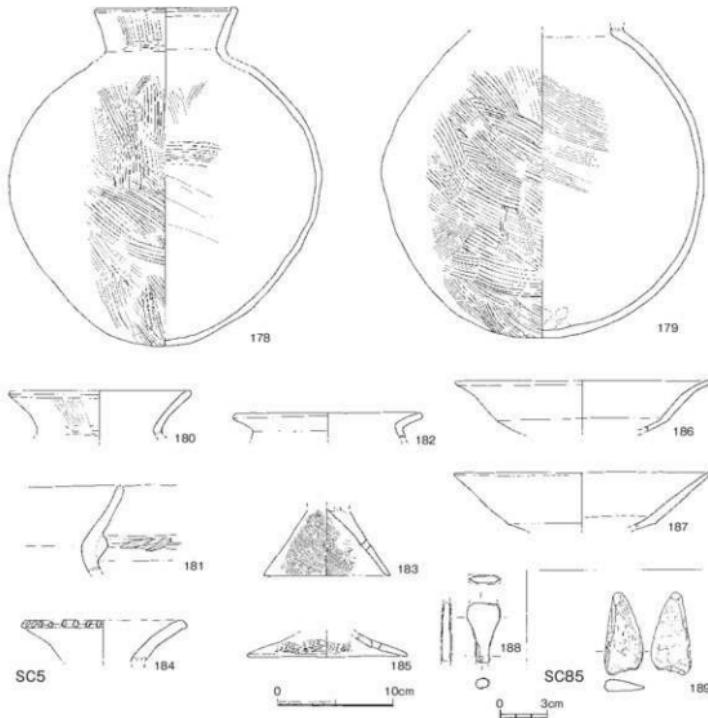


Fig.33 SC5・85出土遺物実測図(1/4-1/3)

出土遺物 (Fig.35) 190～195は短頸壺。190は復原口径13.8cm器高22.5cm。直線的な口縁から、庄内式系の甕に似る。下方が砲弾型にすぼまる球形の胴部に連なり、底部は小さな丸底となる。調整は不明。鈍い黄色を呈する。191は復原口径14cm、内湾気味の口縁で端部は丸く収める。調整は不明。明橙色を呈する。192はやや「く字」口縁の広口の甕で、復原口径10.4cm。口縁端部は丸く収め、頸部の屈曲は緩く、長い胴に連なり、器形は139に似る。口縁は外面ヨコナデ、胴外面に雜なタテ・ヨコハケを施す。内面はナナメハケと思われるが不明瞭。明橙色を呈する。193は復原口径14cmの直口口縁甕で、口縁の端部は細く収め、球形の胴に稜を成して連なる。胴外面に細かなタテハケ、内面頸部以下にヨコケズリを施す。鈍い黄橙色を呈する。194も同様の器形で復原口径11.8cm。口唇内端を浅く窪ませ、外面にタテハケを、内面は不明瞭。鈍い橙色を呈する。195は緩く「S字」状にくねる直口口縁で端部は細く仕上げる。復原口径10cm。口縁内外面をヨコナデ、胴外面に細かなタテハケ内面頸部以下にケズリを施す。鈍い橙色を呈する。196～199は近畿系の甕。196は復原口径15.6cm、外湾気味の口縁内端が突出する。口縁内外面をヨコナデ、胴外面に右上がりのタタキ内面頸部以下にケズリを施す。鈍い黄色を呈する。197は復原口径16cm。稜を成して「く字」に屈曲する口縁端部の内外を浅く窪ませ口唇両端部が肥厚する。口縁内外面をヨコナデ、胴外面に右上がりのタタキ内面頸部直下からナナメケズリを施す。褐灰色を呈する。198は復原口径13.8cm器高16cm。やや外湾して稜を成して「く字」に屈曲する口縁の、端部外面を面取り内端を浅く窪ませる。口縁内外面をヨコナデ、胴外面上位に右上がりのタタキ後細かなタテハケ、内面頸部下にケズリを施す。鈍い橙色を呈する。199は復原口径15.6cm。直線的な「く字」口縁の内端が若干突出する。口縁内外面をヨコナデ、胴外面にタテハケ内面頸部以下にナナメケズリを施す。胴部の最大径は中位下にある。鈍い黄色を呈する。200は近畿系の小型器台の脚部。復原径12cm。調整は不明。中位に円形透かし孔を設ける。明橙色を呈する。201は復原口径30.4cmを測る南部九州系の甕。稜を成さず、緩く短く屈曲する口縁の外面から胴部まで、右上がりの粗いタタキを施す。口唇から口縁内面はヨコナデ、頸部以下にタテハケを施す。胎土は粗い砂粒をやや多く含み鈍い橙色を呈する。202は在地の大甕片で復原口径69cmを測る。「く字」口縁下と胴部中位に断面四角突帯を1条貼付し、胴部突帯にナナメ刻目を施す。口縁内外面から胴部内面はナナメハケ、胴部外面は左上がりのタタキ後雜なタテハケを施す。鈍い

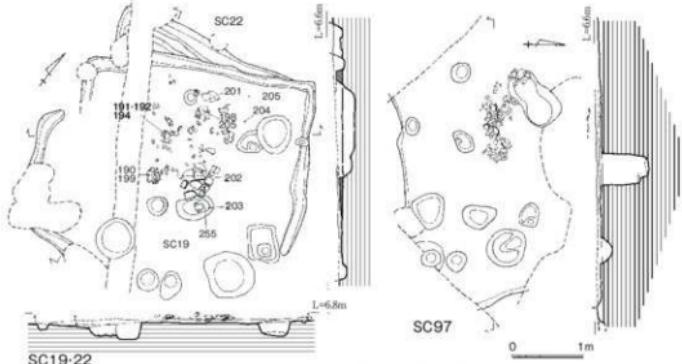


Fig.34 SC19-22-97実測図(1/60)

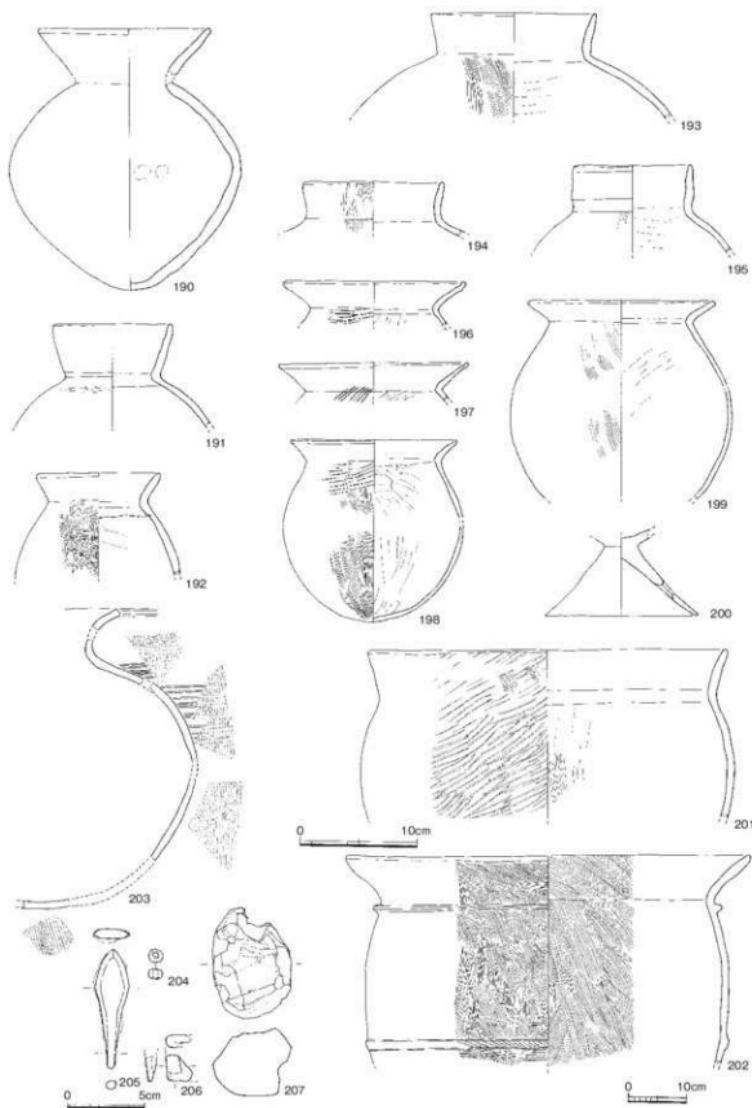


Fig.35 SC19出土遺物実測図(1/4・1/3・1/8)

い黄橙色を呈する。**203**は半島瓦質土器の壺。口縁～底部までの9片の小片が出土した。強く外湾する口縁の端部は浅く窪め、頸部は稜を成さず、球形の胴部から底面外面に細かなタテ繩文タタキ後、上位に幅2mm以下の右回り平行沈線を20条前後施す。内面は回転ナデ消し。胎土は精良で灰色を呈する。胴径30～35cm前後か。**204**は明藍色半透明のガラス小玉。径4.5長4.5孔径1.5mm0.07gを測る。**205**は完形の柳葉形無闇有茎鉄鎌。7.7×2.3cm刃部で厚6.5mm中茎で5.5mm16gを測る。**206**は小型の袋状鉄斧の残片。刃部を折り返し部まで使い減らす。現況で1.7×1.7×0.8cm2gを測る。**207**は軽石製の浮子。粗く円形に整形する。7.1×5.0×4.4cm34gを測る。古墳前期前葉を示す。

SC22 (Fig.34) D2グリッドに位置し、SC19の西部に重なりこれに切られ、床から0～8cm上位がSC19の床面となる。方形プランでSC18を切る。東半部は不明確。3.6×2.58+ α m深さは10cmを測り、幅12～28cm程の壁溝が巡る。方位はN-11°～Wにとる。主柱穴はSC19と重なり判然としない。遺物の大部分はSC19とともに取り上げており、重ならない部分で図化に耐えない古式土器片が少量出土した。

SC97 (Fig.34 PL6-6) F～G5グリッドに位置。方形プランで大部分を搅乱に切られる。4.44+ α m×2.35+ α m深さ10cmを測る。壁溝は無い。方位はN-14°～Wにとる。柱穴は10穴前後検出したが、主柱穴は判然としない。中央の床上20cm程上位に土器片が散布し、コンテナ2箱分を検出している。

出土遺物 (Fig.36) **208**は布留式系の加飾二重口縁壺の口縁片で、口縁上半下端に連続竹管文を施す。他の調整は不明。鈍い黄色を呈する。**209**は近畿系器台の脚端部。復原径20.2cmを測る。内面に細かなヨコハケを施す。外面調整は不明。明橙色を呈する。**210～212**は近畿系の壺。**210**は復原口径13.6cmを測る。外湾気味の口縁内端が突出する。口縁内外面をヨコナデ、胴外面に水平タタキ後下半にタテハケ、内面胴部の上位に右上がりの、下位にタテケズリを施す。鈍い黄色を呈する。**211**は同形の口縁端部外面を浅く窪め、内端部を広く窪ませる。復原口径16.4cmを測る。口縁内外面をヨコナデ、胴外面に粗い右上がりタタキを施す。内面調整は不明。浅黄色を呈する。**212**は復原口径11.2cmを測る。内湾気味の口縁内端が若干突出し、丸い口唇端を浅く窪ませる。調整は不明瞭。鈍い黄色を呈する。**213**は圭頭形の鉄製品で、鎌にしては刃幅が狭く、ヤスの可能性が高いと考えられる。下端部を欠くが4.9×1.0cm刃部で厚4.5mm中茎で6mmを測る。7g。古墳前期前葉。

2).井戸 井戸は、敷地内の東西幅30mの範囲に18軒集中する住居群の、東端の本調査区で1基、住居域内で1基、西端の70次調査区で1基検出され、後期の分布域とほぼ重なる。

SE1 (Fig.37 PL7-1・2) G2グリッドに位置し、SC3を切る。南西の一部が調査区外に広がる。略円形で1.3×1.15+ α m深さ15cmのテラス部の東部に、さらに径90cm、断面は直線的で深さ1.8m、底面が径80cmの円形となる井戸本体を掘る。底面中央は5cm程窪む。上段は別構造の可能性も考えられたが、西側井戸上端が15cm程斜め下方に欠失しており、同時期の風化と判断した。GL-0.3m程



Fig.36 SC97出土遺物実測図 (1/4-1/3)

まで暗灰褐色土が堆積し土器片が集中し（上層）、以下底面附近まで地山ブロックを1/4程含む同土で埋め戻され（中層）、底面上には流出した地山粘質土が堆積する（下層）。遺物は上層中にコンテナ1箱分、中層で少量、底面上で土器片・杭等コンテナ1箱分出土した。

出土遺物 (Fig.38) 大部分は上層出土。214は大形の山陰系二重口縁壺。復原口径28.8cm。口縁上位は若干外傾して直線的に延び下端は小さな突帯状に突出する。口縁端部は面取りし、内端を浅く窪める。外面にヨコナデ、外面頸最狭部に浅い沈線を1条施し、以下にタテハケを施す。内面は調整不明。明赤褐色。215～217・220は近畿系の壺。215は口縁が直線的に延び、端部は丸く收める。口縁内外面をヨコナデ、外面胴部中位にタテハケ、内面頸部以下にヨコケズリを施す。復原口径17.2cm。鈍い黄色。216は直線的に延びる口縁の端部を丸く收め、内端を浅く窪める。胴部最大径はやや上位にある。口頸部の外面にヨコナデ、以下胴部外面に細かなヨコハケ後上位に浅い波状沈線を、内面頸部以下に右上がりのナメケズリを施す。復原口径17.6cm。鈍い黄色。217は若干内湾気味に直線的に延びる口縁の端部を浅く窪ませ、両端が肥厚する。口頸部の外面にヨコナデを施す。復原口径17.2cm。浅黄色。220は口縁が内湾気味に延び、端部は丸く收める。口頸部外面にヨコナデ、外面胴部にタテハケの痕跡が残る。内面頸部以下にヨコケズリを施す。復原口径17.8cm。鈍い黄色。218・219は下層出土の甕口縁部。ともに緩く外湾する口縁の端部を浅く窪め218は外面にヨコハケ後外面から内面上位にヨコナデ、内面下位にハケメが残る。復原口径25.6cm。鈍い黄色。219は外面にタテハケ内面にヨコハケ後、外面から内面上位にヨコナデ、内面下位にハケメが残る。復原口径17cm。橙色。221は五様式系甕の底部。底径3.4cm。外面はヘラナデでくびれを整形、内底に放射状のヨコハケが残る。橙色。222は匙形土製品。柄の端部と体部の2/3を欠損するが、体部で復原口径6.5器高4cm程を測る。全面に指頭での粗いナデ調整を施す。明褐色。223は管状土錐で、長2.2径1.2cm孔径3mm3g。明褐色。224は釘状の鉄製品。軸部が若干曲がる。長3.3cm幅7mm2gを測る。軸部は4mm角の断面で先端が尖り、頭部は打ち広げて「L字」状に折り曲げている様で、和釘に極似している。遺構上部からの出土

であり、後代からの混入の可能性がある。以上古墳前期前葉を示す。

SE54 (Fig.37 PL7-3・4)

C1グリッドに位置し、SC33を切る。大半が調査区外に延びており完掘できていない。やや不整の円形プランで、径1.16を測る。GL-25cm程までに土器片が集中して出土する。-60cm程まで掘削した。遺物は上位を中心にコンテナ3箱分検出した。

出土遺物 (Fig.39) 225～

230は壺。225は五様式系。復原口径13.6器高25cm。

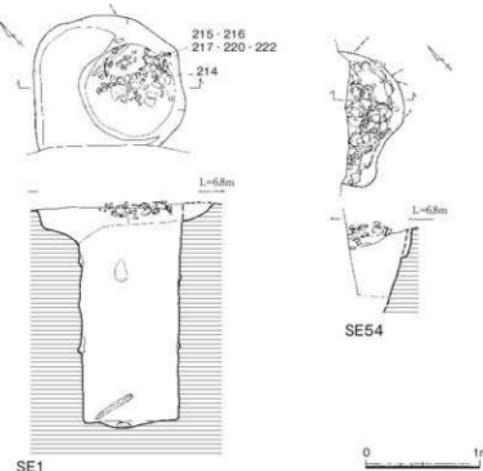


Fig.37 SE1-54実測図(1/40)

口縁は緩く外湾し端部は丸く收める。頸部は稜を成して屈曲し球形の胴部に連なる。底部脇は強くくびれ径4.3cmの厚い小さな平底となる。底部際は丸く仕上げる。口縁内外面にヨコナデ以下は外面胴下位に右上がりのナナメタキが以外は器面が荒れ不明確。明赤褐色。226は復原口径16cmの短頭直口口縁壺で、口縁は緩く外湾してやや外傾し端部は丸く收め、頸部は稜を成さない。調整は不明確。明橙色。227は復原口径25.6cmのやや大形の二重口縁壺で屈曲部は三角突帯状に整え上位は緩く外湾外反する。頸部は稜を成して屈曲し外面に低い四角突帯を貼付しナナメ刻目を施す。胴は直線的に張り長くなる。口縁内外面にヨコナデ外面頸部以下にタテハケ後ナデ消し、胴内面にヨコハケ下半をさらにナデる。鈍い黄橙色。228はやや広口の壺。復原口径13cmで端部は丸く納める。外面頸部は稜を成して屈曲。口縁内外面にヨコナデ外面頸部以下にタテハケを施す。鈍い橙色。229は丸底の直口口縁壺で復原口径14cm。やや長く延びる口縁の端部は細く内湾気味に仕上げ、頸部は稜を成さないで屈曲しやや長い球形の胴に連なる。調整は不明瞭で、胴外面に粗いヨコ・ナナメタキ後ナナメハケ内面にヨコ・ナナハケが残る。赤橙色。230はやや長頸の壺で、復原口径22.4cm。上位で若干外方に屈曲し口唇を面取りし両端が肥厚。外面上位に粗い以下に細かなタテハケ、内面にヨコハケを施し口縁内外にヨコナデを施す。鈍い橙色。231～233は近畿系の壺。231は口縁が緩く外湾して延び端部は細く仕上げ内端を浅く窪める。復原口径23.5cm。口縁内外面をヨコナデ、外面胴部に右上がりのタタキ後中位以下に細かなタテハケ内面頸部以下に左上がりのナナメケズリを施す。鈍い黄色。232は口縁が直線的に延び端部は面取り。復原口径20.8cm。口縁内外面をヨコナデ、外面胴部に細かなタテハケ内面頸部以下に左上がりのナナメハケを施す。浅黄色。233は小形で復原口径9.6cm。口縁は若干内湾気味に延び端部は面取りする。調整は不明瞭。灰白色。234は丸底の有孔鉢。中央に径5

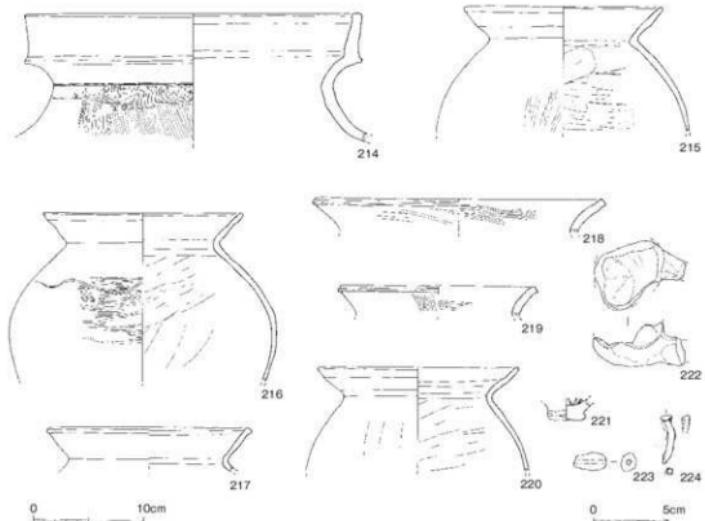


Fig.38 SE1出土遺物実測図(1/4)

mmの焼成前穿孔を施す。内外面にナデを施す。鈍い黄色。235は体部に屈曲を持たない広鉗の高杯。復原口径24.4cm。丸い体部から稜を成して屈曲し、口縁が外傾して直線的に長く延びる。端部は丸く収める。口縁内外面をヨコナデ、体部内面に左上がりのナナメハケを施す。鈍い橙色。236は短頭の小型丸底壺。復原口径7.5器高6.8cm。胴下半はややすぼまる。調整は不明瞭。鈍い橙色。237はミニチュア土器で丸底壺形。復原口径5.2器高2.4cm。指頭圧とナデで調整する。明橙色。238は低い筒形器台。復原口径8.0器高9.7cm。上下端部内外にヨコナデ、体部外面にタテハケ内面にナデ・シボリ痕が残る。橙色。239は高杯脚部。復原径15.6cm。外面にタテハケ一部タテケンマ、内面に左上がりのナナメハケを施す。屈曲部に円形透かし孔を設ける。鈍い橙色。弥生終末～古墳初頭を示す。

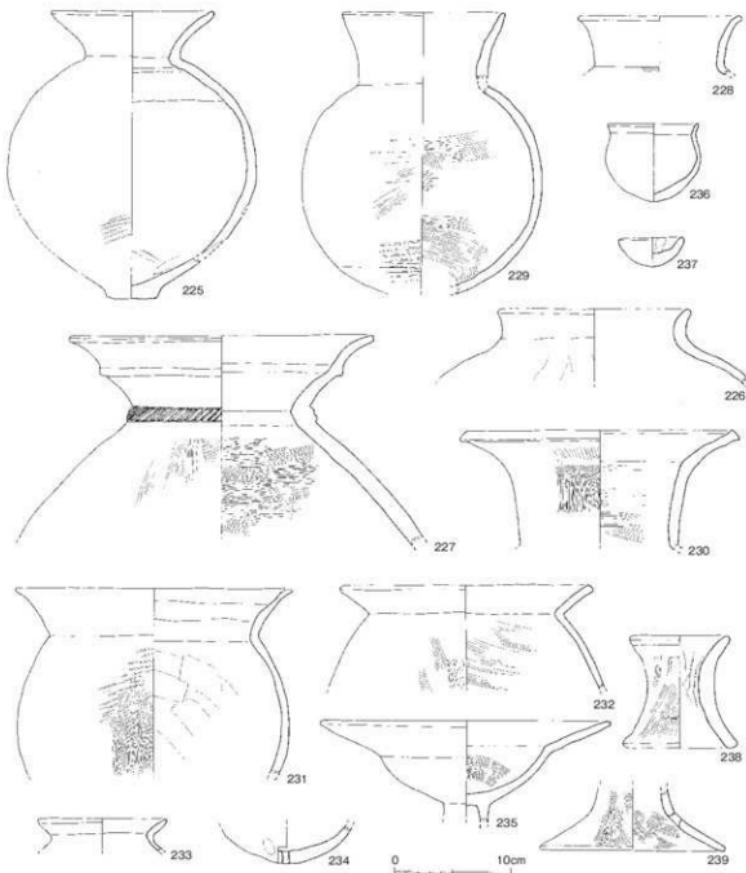


Fig.39 SE54出土遺物実測図(1/4)

3).土壤 土壌は堅穴住居の周辺で26基検出した。中期とほぼ同数に回復する。

SK67 (Fig.40 PL7-5) L3グリッドに位置し、SK69を切る。小型の略隅丸三角形プランで $0.84 \times 0.45\text{m}$ 深さ20cmを測る。上位に土器片がまとまって出土する。

出土遺物 (Fig.41) **240・241**は丸底坏で、**240**は復原口径12cm。浅い器体で調整は不明。橙色。**241**は復原口径12cm。体部はやや深く調整は不明。橙色。**242**は復原口径12.6器高8.9cmの小型丸底壙。調整は不明。橙色を呈する。他に布留式甕の小片があり古墳前期前半と思われる。

SK71 (Fig.40 PL7-6) I5グリッドに位置し、SK72を切る。略楕円形プランのやや大型の土壌で、 $1.76 \times 0.8\text{m}$ 深さ16cmの浅い土壌である。遺物の出土は少量。

出土遺物 (Fig.41) **243**は大形の無茎有脚三角形鉄鏃で、 $7.4 \times 3.3 \times 0.6\text{cm}$ 23g、脚は長い方で1.5cmを測る。他に五様式系甕の小片等が出土する。弥生終末～古墳初頭と考えられる。

SK82 (Fig.40 PL8-1・2) J6グリッドに位置する。楕円形プランで $1.25 \times 0.7\text{m}$ 深さ40cmで下面に柱穴が重なる可能性がある。上位20cm程に土器片がまとまって出土する。

出土遺物 (Fig.41) **244**はほぼ完形の直口口縁壙。口径15.9器高28.8cm。口縁内面に粗いヨコハケ後内外面にヨコナデ、胴部は突帶上で接合され外面上位にタテハケ以下にタテケズリを、内面胴上位に粗いヨコハケ下位にタテ・ナナメハケを施す。鈍い黄橙色。弥生終末か。

SK83 (102次調査SC6) (Fig.40 PL8-1) J6グリッドのSK82に接して位置する。102次調査SC6の方形住居北東隅に当たる。隅の床から若干浮いた状態で土器片がまとめて出土する。

出土遺物 (Fig.41) **245**は直口口縁の甕。復原口径17.2cm。口縁内外面にヨコナデ、胴外面に極めて粗いヨコ・ナナメタタキを施す。内面は不明瞭。橙色を呈する。弥生終末～古墳初頭。

SK87 (Fig.40 PL8-3・4) I2グリッドに位置し、SC52・SX114を切る。不整形のやや大型の土壌で、 $2.3 \times 1.44 + \alpha\text{m}$ 深さ15cm。両端がさらに円形に50cm程窪む。遺物は主に5~20cm上位に西から流れ込んだ状態で検出され、15cm程下に粗砂が5cm程堆積する。

出土遺物 (Fig.41) **247～249**は甕。**247**は口縁外面に粗めのタテハケ後内外をヨコナデ、胴上面にヨコタタキ後以下にナナメハケ、内面にヨコ・ナナメハケ。復原口径18.2cm。黄色。**248**は口縁内外面にヨコナデ、胴外面にタテハケ内面にヨコハケ。復原口径14.9cm。橙色。**249**は近畿系の甕。

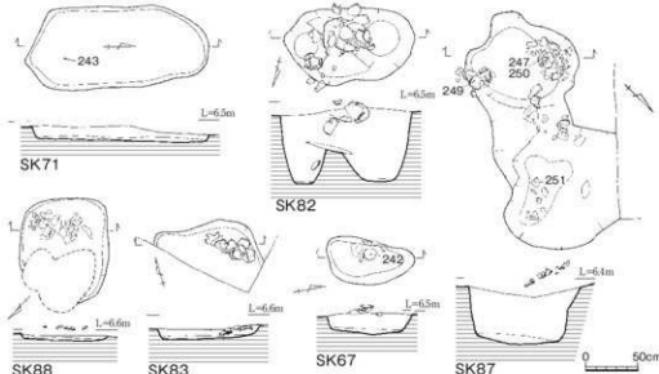


Fig.40 SK67-71・82・83・87-88実測図(1/40)

復原口径15.6cm。口縁内外面をヨコナデ、外面胴部にナナメタキ口縁下に細かなタテハケ内面頸部以下にナナメケズリ。浅黄色。250は短脚の小型高杯。復原口径12.1cm。調整は不明。橙色。251は壁の厚い支脚。復原径12.4cmを測る。調整は不明。浅黄色。古墳初頭～前期前葉。

SK88 (Fig.40 PL8-5) 15グリッドに位置する隅丸方形プランの土壇で、西側は柱穴に切られる。1.08×0.85m深さ8cmで浅い。東半部の床から10cm程上位に土器がまとまって散布する。

出土遺物 (Fig.41) 246は二重口縁壺。復原口径20.8cm。口縁内外面にヨコナデ、胴外面は頸部下にヨコハケ以下にタテハケ内面にヨコ・ナナメハケ。鈍い黄色。弥生終末か。

4).柱穴出土遺物 柱穴は、該期で90前後を検出した。調査区東部に多くみられるが建物の復原は

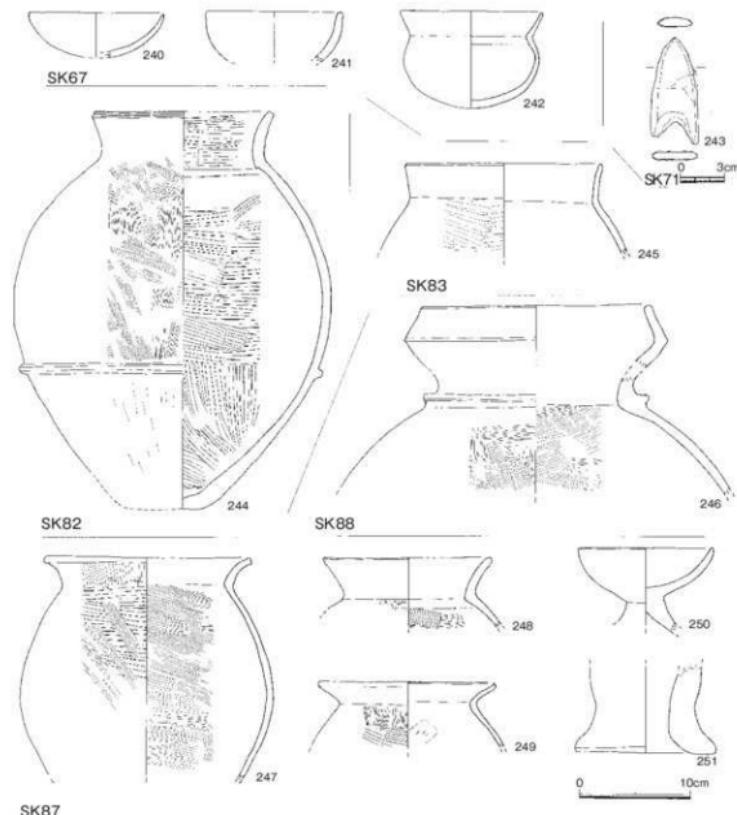


Fig.41 SK67·71·82·83·87·88出土遺物実測図(1/4·1/3)

困難である。該期の柱穴から出土したおもだつた資料を報告する。

出土遺物 (Fig.42) 254はD3・SP8出土の近畿系甕。口径15.9cm。外面胴部に粗いヨコハケ内面頸部以下にナナメケズリ。鈍い橙色。255・256はD2・SP13出土。255は甕で(PL8-6)、復原口径13器高18.6cm。外面胴部にタテヨコハケ、内面は不明瞭で底面に押し出し痕。鈍い橙色。256は小型丸底甕。復原口径10器高7.6cm。胴部外面はタテ・ヨコハケ内面は不明瞭。浅黄色。257はG5・SP8出土の壺。手捏ね整形で口径10器高3.5cm。橙色。258はC2・SP9出土の壺。口縁を欠き胴部で径16.1cm。外面は調整不明瞭、内面中位以下にヨコ・ナナメハケ。破断面は磨り無頬壺として再利用。橙色。260はI3・SP2出土の滑石製紡錘車。径4.3cm軸孔径6mm。261もC4・SP11出土の滑石製紡錘車。径4.6cm軸孔径6mm。262はC4・SP11出土の滑石製紡錘車。径4.6cm軸孔径6mm。263もC4・SP11出土の滑石製紡錘車。径4.6cm軸孔径6mm。264はC4・SP11出土の滑石製紡錘車。径4.6cm軸孔径6mm。265は柱穴から出土した滑石片。266は柱穴から出土した滑石片。267は柱穴から出土した滑石片。268は柱穴から出土した滑石片。269は柱穴から出土した滑石片。270は柱穴から出土した滑石片。271は柱穴から出土した滑石片。272は柱穴から出土した滑石片。273は柱穴から出土した滑石片。274は柱穴から出土した滑石片。

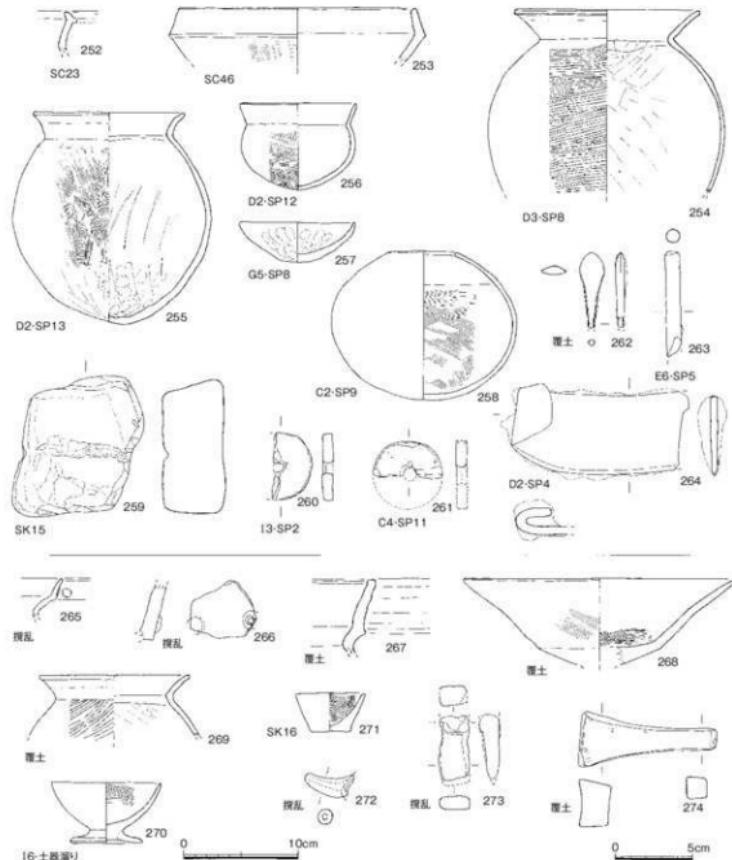


Fig.42 柱穴その他の出土遺物実測図(1/4-1/3)

cm軸孔径7mm。263はE6・SP5出土の径9mmの中茎状鉄製品。7.0cm17gを測る。264はD2・SP4出土の大型の手鎌残片。11.2×5.2×1.8cm折り返し幅2.3内径で0.6cmを測る。118g。刃厚は5mm程。

5).その他の出土遺物 (Fig.42) 252は東部瀬戸内系の拡張口縁壺。口縁外面に凹線を2条施す。胎土は精良で浅黄色。後期後葉か。253は二重口縁壺。口径20.6cm。橙色。後期後葉。259は大型有溝石錘。砂岩の亜角礫で溝は敲打する。12.6×11.5×5.5cm1319g。262は柳葉形有間有茎鉄鎌。5.0×1.65cm刃部で厚6mm中茎で3.5mm9g。265・266は近畿系二重口縁加飾壺。265は外面下方に円形浮文。灰黄色。266は竹管を押す円形浮文を連続貼付。鈍い黄橙色。267は山陰系の二重口縁壺。外面に幅広の凹線を3条施す。褐色。268は高杯。口径24cm。橙色。269は近畿系の甕。口径13cm。灰褐色。270は低脚杯で口径9.4器高5.3cm。胎土は精良で赤橙色。271はミニチュア平底鉢形土器。口径5.7器高3.4cm。鈍い橙色。272は土器注口部。基部で径2.2孔径0.5長3.7cm。鈍い黄色。273は整状鉄器。先端と袋部を欠損し現況で4.1×2.0×1.3cm23gを測る。両刃で刃長2.9刃厚0.9cm。上部は1.8×1.3cmの節帶状になる。274は仕上砥石。4側面と下端面を砥面とし中央で折損後切断面を敲打で器面調整し再生する。9.0×3.6×2.5cm、上端は1.4×1.3cmまでに減る。泥岩製。

IV. 小結

調査の結果、弥生中期後半を主に竪穴住居12軒・井戸3基・土塙27基・溝1条・不整形土塙6基、後期で竪穴住居4軒・井戸3基・土塙8基・溝1条、終末～古墳前期で竪穴住居8軒・井戸2基・土塙25基・溝2条と、574にのぼる柱穴を検出し、3時期の遺構の密集地であることを確認した。遺物はコンテナ95箱分出土した。

剥片尖頭器をはじめ旧石器から縄文早期の石器・剥片を26点検出し、一定程度の分布を示すが、いずれも遊離している。弥生期の黒曜石は237点の剥片から9点の不効率な石器製作を行っている。

周辺の調査成果も同様弥生中期後半期がひとつの盛期となる。中期の住居は円形と方形があり、敷地内の全域に広がる。円形が大型でSC52は径8.8mを測る。50次調査SC119は12.5mを測る大型で、中心施設となる。井戸からは大型甕を井筒状に打ち欠いた加工品の破碎片が出土し、井戸廐棄祭祀品と考えられる。立岩式古段階のSE36は丁寧に打ち欠いた全周破片が出土し、立岩式新段階のSE12では打ち欠きは粗く半周分しか出土せず、祭祀の退行が伺える。後期は集落の縮小期にあたり、井戸は同数であるが中期遺構の1/3程に減少する。竪穴住居は以降方形で、敷地内の南西部に分布する。後期前半のSE12からは大型甕の下位を打ち欠いた全周の1/3程の破碎片が出土し、中期同様の井戸廐棄祭祀が継続されている可能性があるが、以降の井戸からはまとまって出土しない。終末から古墳前期は盛期に回復し、竪穴住居は敷地の中央部東西30m程の域内に分布する。古墳初頭前後のSC5の柱穴・SK87は粗砂が5cm前後まとまって堆積する。近現代の搅乱壠の底面に同様の砂敷があつたため、搅乱と混同したもののが他にも数基あり、該期に多量の粗砂が集落内に持ち込まれている。

遺物では中期で投弾が7点混入で2点出土し、前期段階の飛鏢は1点も出土せず、投擲武器は投弾に切り替わっている。また、石剣石戈の大型武器、石包丁・石鎌の農具、柱状石斧等の工具が小割に分割され、主に磨製石鎌の素材となる石片が後期にかけて、武器で8片農具で29片工具で9片出土しており、大型武器・農具・工具の金属への転換と、鐵鎌が十分に行き渡らない状況を示している。磨製石鎌は8点出土している。鉄器は鉛・鎌・刀器・不明品の4点が出土した。他に凹石・叩石が10点、他時期

と時期不詳品を合わせ四石が 15 点叩石が 26 点出土し、石器加工を伺わせる。また鉄器の普及を反映して砥石が中期で 6 点後期で 5 点終末～古墳前期で 8 点時期不詳品で 7 点の 26 点出土する。鉄器とともにガラス玉類が中期で 2 点他時期で 2 点生活遺構から出土し、一般化と遺跡群の先進性を体现している。鉄器は後期で袋状鉄斧 2 点終末～古墳前期で鎌 4 点・手鎌・袋状鉄斧・ヤス・中茎各 1 点の 8 点、時期不詳の鎌 2・袋状鉄斧・整各 1 点を含む 13 点の計 28 点出土しており、多出と鉄鎌の増加がみられる。内水面の遺跡としては漁撈具の出土も目立ち、中期で銛・石錘・土錘の 4 点後期で土錘 1 点終末～古墳前期でヤス・石錘・浮子・土錘の 4 点時期不詳でアワビオコシ 1 石錘 2 点が出土する。外来系の土器も目立ち、後期以降、半島・山陰・山陽・近畿の各地系の土器が出土する。

Tab.1 遺構一覧. 1

Tab.2 遺構一覧. 2

上層 部番号	グリッド 番号	時 期	規 模 面 × 高 × 厚 (m)	平面形	主な出土遺物	考 参	実 真 番号	特 国 番号
SK2	F1	古墳周囲	2.2×0.41×0.16	楕円形	土器(壺・甕・土釜・石器)・瓦・石器	SC6*		
SK4	G2	私井中腹手	3.38×1.64×0.06	円形	土器(壺)	SC6*		
SK4	G4	古墳周囲	2.39×17×0.2	楕円形	土器(壺・瓦・石器)	SC54-65		
SK69	E3	私井中腹手	2.1×20×0.21	方形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片・石器)・瓦片・石器	SC104-406	13	
SK11	F4	古墳周囲手	1.2×0.41×0.19	楕円形	土器(壺・甕・土釜・石器)	SC29*		
SK14	D4	古墳周囲手	0.95×0.41×0.06	円形	土器(壺・瓦・土釜・石器)	SC6*		
SK15	D3	古墳周囲手	0.95×0.40×0.1	円形	土器(壺・瓦・土釜・石器)	SC6*		
SK16	F1	私井中腹手	1.6×0.41×0.06	方形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片・石器)・瓦片	SC104-406	13	
SK17	C2	私井中腹手	1.2×0.41×0.06	楕円形	土器(壺・瓦・土釜・石器)	SC6*		
SK29	C1	私井中腹手	1.13×0.41×0.25	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片・石器)・瓦片	SC6*		
SK21	C1	私井中腹手	1.2×0.41×0.05	方形	土器(壺・瓦・土釜・石器)	SC6*		
SK27	E2	私井中・古墳周	1.20×0.45×0.22	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)	SC6*		
SK28	C3	古墳周囲手	0.55×0.40×0.17	円形	土器(壺・瓦・土釜・石器)	SC6*		
SK31	D6	私井中・古墳周	1.7×0.41×0.12	台形	土器(壺・瓦・土釜・石器)	SC6*		
SK32	C4	私井中腹手	1.65×0.41×0.2	方形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)・土器	SC6*		
SK37	B6	古墳周囲	1.11×0.41×0.21	方形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)	SC6*		
SK38	B4	私井中腹手	1.5×0.41×0.03	不規形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
SK39	D4	私井中腹手	0.96×0.40×0.2	円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC31内	13	
SK41	H6	私井中腹手	2.3×0.41×0.35	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)・瓦片	SC6*		
SK44	H1	私井中腹手	1.38×0.41×0.12	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
SK47	H4	私井中腹手	1.60×1.51×0.22	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
SK48	F4	私井中・古墳周	1.8×1.15×0.55	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・土釜・石器)・瓦片・石器	SC6*		
SK49	C6	私井中・古墳周	0.85×0.40×0.23	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
SK50	D6	私井中・古墳周	1.1×0.40×0.24	方形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
SK51	E4	私井中・古墳周	1.35×1.15×0.01	不明	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
SK55	G4	私井中・古墳周	1.00×0.51×0.11	円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
SK56	D2	私井中・古墳周	2.15×0.40×0.24×0.09	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)	SC6*		
SK57	D2	私井中・古墳周	1.30×0.40×0.55×0.11	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)	SC6*		
SK58	M2	私井中・古墳周	1.16×1.01×0.28	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)・石器(瓦)・瓦片	柱穴方水	2-4	13
SK60	N2	私井中・古墳周	1.55×0.40×0.28	円形	土器(壺・瓦・盆)	SK58-406		
SK61	M3	私井中・古墳周	1.15×0.40×0.01	不明	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
SK62	M2	私井中・古墳周	1.30×0.28×0.28	楕円形	土器(壺・瓦・盆)	SC6*		
SK63	L3	古墳周囲	1.00×0.40×0.25	不規形	土器(壺・瓦・盆・盞・陶器・石器)	SC6*		
SK64	M3	私井中・古墳周	1.12×0.95×0.25	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)・石器(瓦)	柱穴方水	28	
SK65	D2	私井中・古墳周	0.75×0.40×0.03	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)	SC6*		
SK66	D2	私井中・古墳周	1.7×0.41×0.01	不明	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)	SC6*		
SK67	L3	古墳周囲手	0.45×0.45×0.2	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)	SK69-406	7-5	40
SK69	K3	私井中・古墳周	0.95×0.40×0.11	楕円形	土器(壺・瓦)	SK69-406		
SK70	K3	私井中・古墳周	1.15×0.40×0.13	不規形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
SK71	E5	私井中・古墳周	1.75×0.40×0.16	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SK72-406	7-6	40
SK72	H6	私井中・古墳周	1.65×1.25×0.25	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)・石器(瓦)・瓦片	朱雀(追跡部)	3-5	13
SK75	H3	私井中・古墳周	1.16×0.62×0.19	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)・石器(瓦)	朱雀(追跡部)		
SK76	H2	私井中・古墳周	0.90×0.75×0.04	不規形	土器(壺・瓦・盆・盞)・瓦片	SC6*		
SK77	H3	私井中・古墳周	1.72×1.24×0.01	不明	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)	SC6*		
SK78	H4	私井中・古墳周	1.08×0.40×0.23	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC53内		
SK79	H5	私井中・古墳周	1.11×0.75×0.29	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC53内		
SK81	H6	私井中・古墳周	0.65×0.60×0.24	方形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)	SC6*		
SK82	H6	私井中・古墳周	1.20×0.70×0.27	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)・石器(瓦)	8-1-2	40	
SK83(1)/H2	H3	私井中・古墳周	1.50×0.36×0.29	方形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)・石器(瓦)	8-1-2	40	
SK84	H6	古墳周囲手・前	1.11×0.40×0.16	方形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
SK87	E2	古墳周囲手	2.5×1.41×0.02	不規形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)・石器(瓦)・瓦片	8-3-4	40	
SK88	E3	私井中・古墳周	1.00×0.80×0.08	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞・瓦片)	SC6*		
SK89	G4	私井中・古墳周	0.82×0.40×0.4	円形	土器(壺・瓦)	SC6*		
SK100	D6	私井中・古墳周	1.35×0.40×0.2	椭状	土器(壺・瓦)	SC6*		
SK102	E5	私井中・古墳周	1.32×1.00×15	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC42-406	13	
SK103	H6	私井中・古墳周	1.25×1.54×0.16	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC59	28	
SK104	H4	私井中・古墳周	1.11×0.40×0.3	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC59	28	
SK109	D4	私井中・古墳周	0.95×0.70×0.08	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞)・石器(瓦)・瓦片	SC6*		
SK110	H4	私井中・古墳周	1.00×0.40×0.36	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)・石器(瓦)	SC6*		
SK111	C3	私井中・古墳周	0.75×0.50×0.07	楕円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	SC6*		
石 墓 形 上層部番号								
SK45	H1	私井中・古墳周	1.50×0.40×0.12	不規形	土器(壺・瓦・盆・盞)	倒木塗		
SK107	G4	私井中・古墳周	2.03×1.20×0.58	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)・石器(瓦)・瓦片	倒木塗	15	
SK108	F7	私井中・古墳周	2.5×2.5×0.4	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)・石器(瓦)・瓦片	倒木塗	15	
SK112	H-112	私井中・古墳周	3.2×2.0×0.15	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)・石器(瓦)・瓦片	小穴葬	15	
SK113	H2	私井中・古墳周	2.66×1.8×0.08	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)・石器(瓦)・瓦片	小穴葬	15	
SK114	1-3-4	私井中・古墳周	4.98×2.2×1.0	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)・石器(瓦)・瓦片	小穴葬	3-6	15
遺 墓 形 下層部番号								
SK28	E3	私井中・古墳周	0.45×0.12	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)・石器(瓦)・瓦片	倒木塗	28	
SK24	E1	私井中・古墳周	0.65×0.09	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	倒木塗		
SK90/H10/J5	J5	古墳周囲	0.69×0.07	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	倒木塗		
SK2C2	E6	私井中・古墳周	0.22×0.08	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	倒木塗		
SK92	F6	私井中・古墳周	0.22×0.06	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	倒木塗		
SK105	F6	私井中・古墳周	0.22×0.06	椭円形	土器(壺・瓦・盆・盞)	倒木塗		

図 版

PLATES



1. 1区遠景（南西から）



2. 2区遠景（南西から）



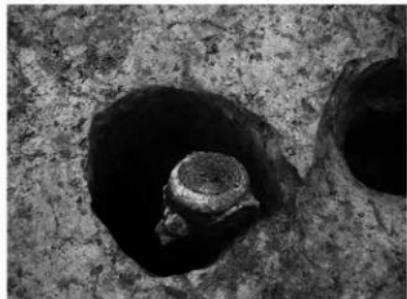
1. SC52 (南から)



2. SC35 (東から)



3. SC42 (南東から)



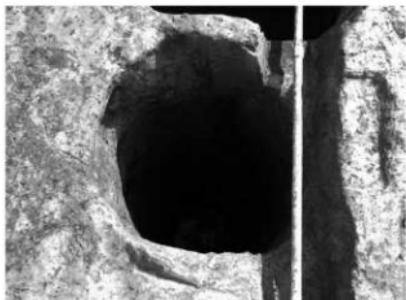
4. SC42内 SP9 (南東から)



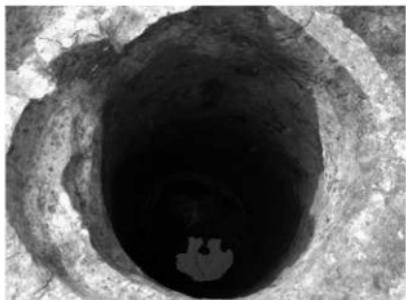
5. SE36遺物出土状況 (南東から)



6. SE36完掘状況 (南東から)



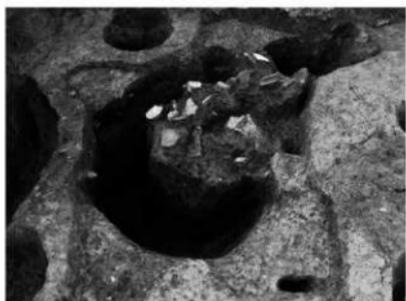
1. SE89完掘状況（北西から）



2. SE101遺物出土状況（北西から）



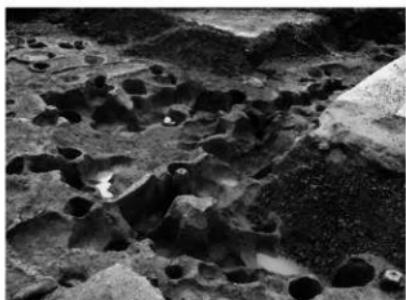
3. SE101完掘状況（北西から）



4. SK58遺物出土状況（南東から）



5. SK72遺物出土状況（南から）



6. SX114（北から）



1. SC53 (南西から)



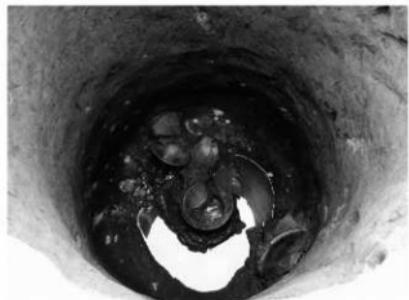
2. SC68 (東から)



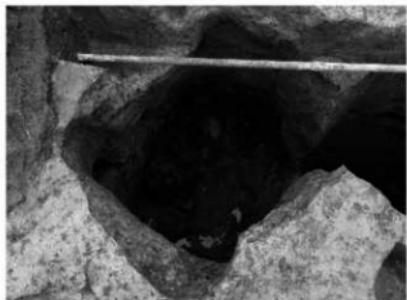
3. SC68土器出土状況 (南から)



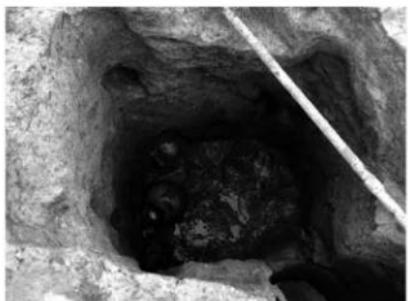
4. SE12 (北東から)



5. SE12遺物出土状況 (北東から)



6. SE90土器溜り上面 (南東から)



1. SE90土器溜り下面（南東から）



2. SC5（南から）



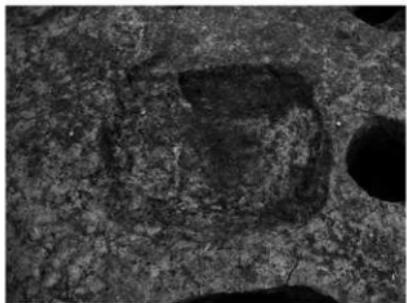
3. SC5土器（180・187）出土状況（南から）



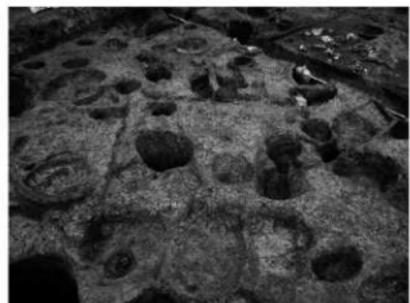
4. SC5土器（178・179）出土状況（北西から）



5. SC5炉断面（南から）



6. SC5炉底（南から）



1. SC18 (南から)



2. SC85 (南から)



3. SC19・22 (西から)



4. SC19遺物出土状況 (西から)



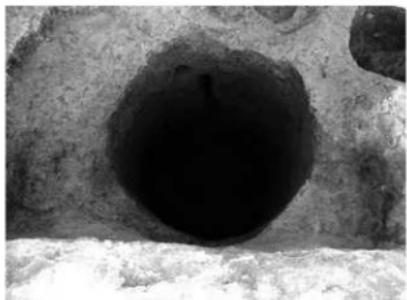
5. SC19下面 (西から)



6. SC97 (北から)



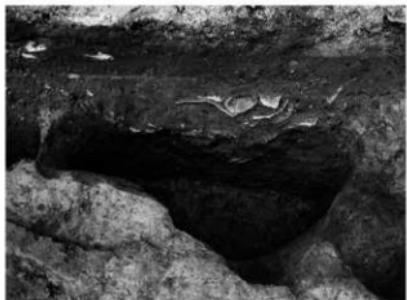
1. SE1遺物出土状況（北東から）



2. SE1（北東から）



3. SE54遺物出土状況（南東から）



4. SE54断面（南東から）



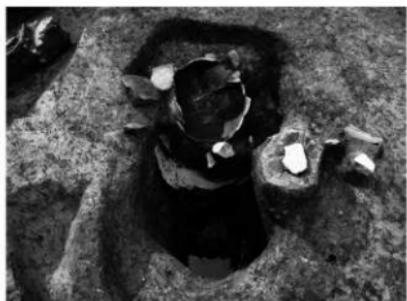
5. SK67遺物出土状況（南東から）



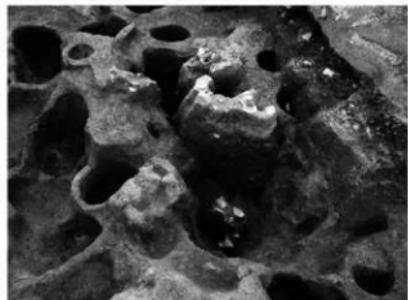
6. SK71（西から）



1. SK82・83（左）（西から）



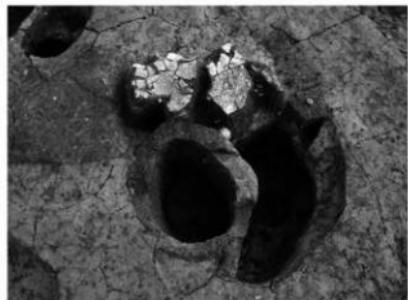
2. SK82遺物出土状況（東から）



3. SK87遺物出土状況（東から）



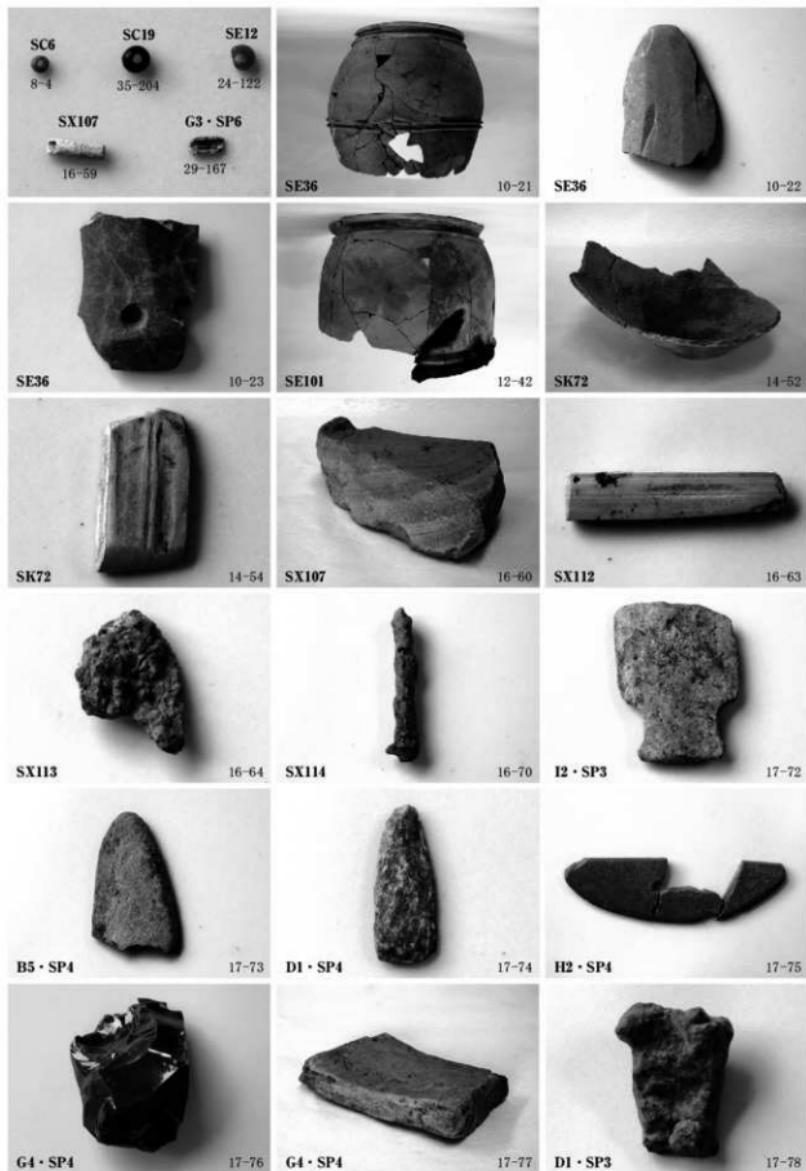
4. SK87粗砂断面（東から）



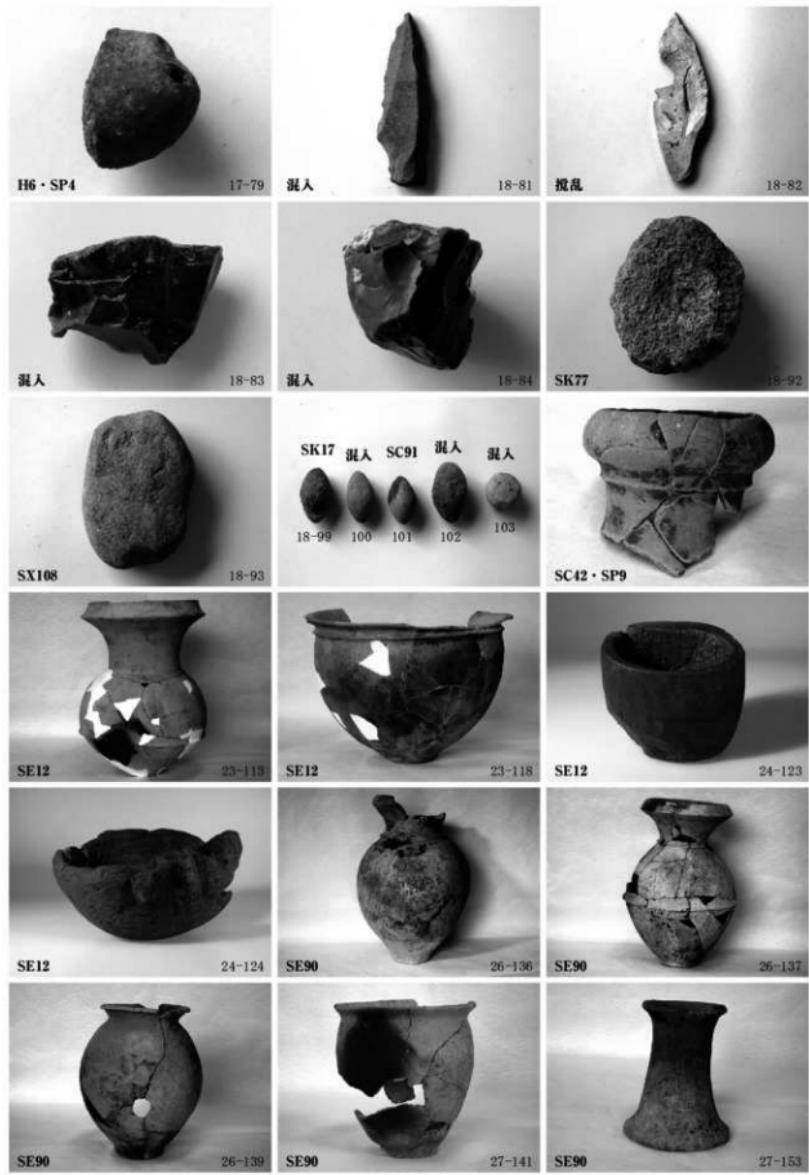
5. SK88遺物出土状況（北から）



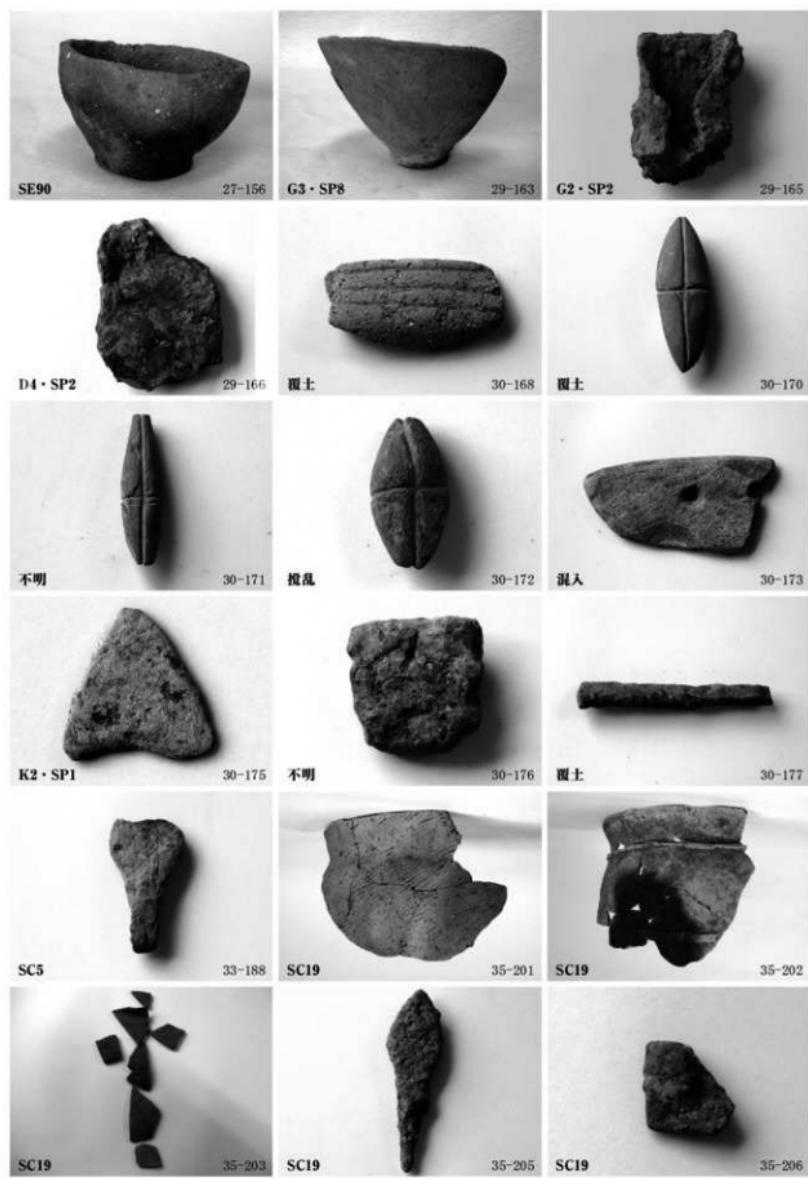
6. D2-SP13土器（255）出土状況（北東から）



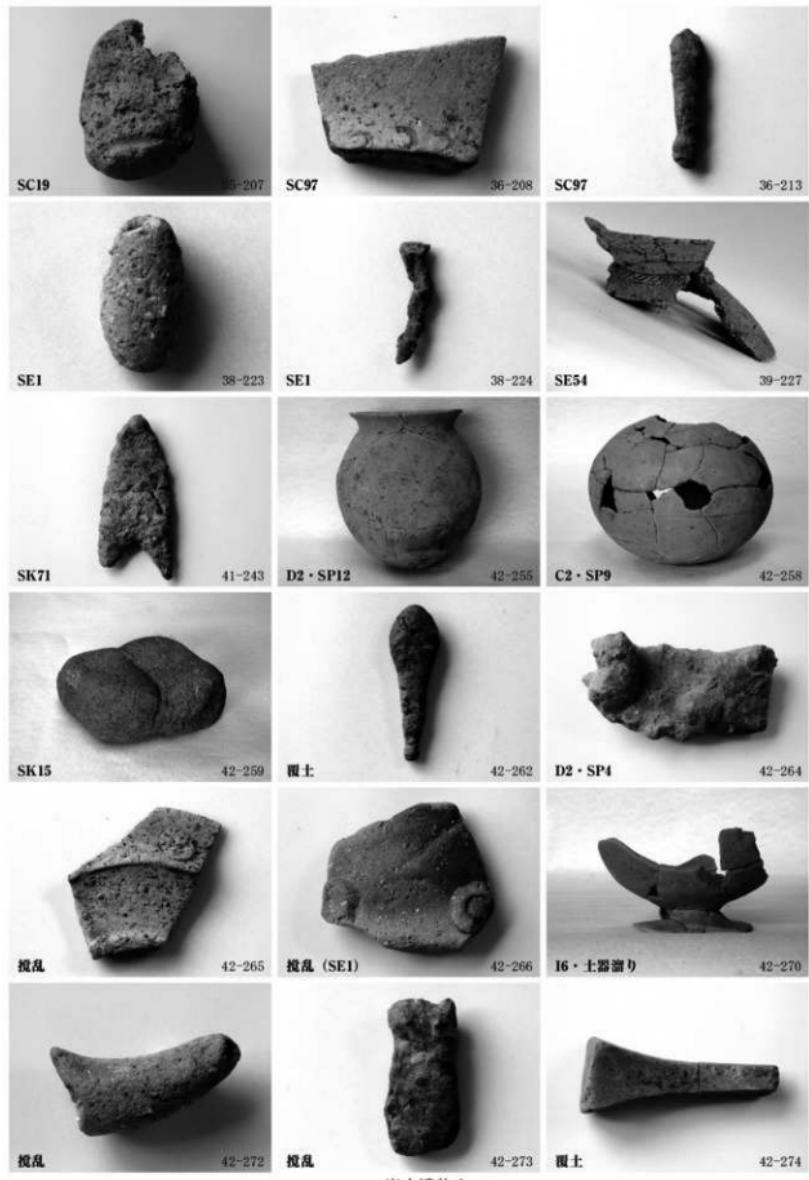
出土遺物.1



出土遺物 2



出土遺物.3



報告書抄録

比恵74

—比恵遺跡群第134次調査報告—
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1296集

2016年（平成28年）3月25日発行

発 行 福岡市教育委員会
福岡市中央区天神1丁目8番1号

印 刷 有限会社 白木印刷
福岡市南区若久1丁目2-30
